

# 浜弓場遺跡

—緊急発掘調査報告—

1973

伊那市教育委員会

# 浜弓場遺跡

—緊急発掘調査報告—

1973

伊那市教育委員会

## 序

社会の急激な発展にともない、地域開発の要請により、心ならずも貴重な遺跡を発掘せざるを得ない場合が次第に多くなってきています。市としても御殿場、福島、三ツ木、月見松、阿原、白沢の各遺跡古墳も各種開発事業のためやむなく発掘し、それぞれ報告書を刊行してきました。

今回の手良中坪浜弓場遺跡（縄文時代早期から鎌倉時代に至る複合遺跡）も耕地整理のため遺跡が消滅されることになり、上伊那考古学会の諸先生によって重要性が指摘され、市としてもその重要性を認め、県教育委員会担当の諸先生並びに土地所有者の方々の協力を得て調査をいたしました。

調査は昭和46年3月24日、25日の2日間の試掘に始まり、昭和47年12月2日から9日までの本調査に至る間、土地所有者神林賛三、向山幸人の両氏と県教育委員会桐原指導主事、上伊那考古学会の諸先生方と地元の方々の心からなるご協力により本調査が多大の成果をおさめたことについて深甚なる感謝を表わす次第であります。

この報告書が上伊那地域の遺跡調査の上に役立つことを願ってやみません。

昭和48年3月20日

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

## 凡　　例

1. この調査は、国県補助事業による緊急の記録保存事業であるため、昭和47年度中に報告書刊行の義務を有する。よってこの報告書は図版を主体として、文章記述は簡略化した。
2. この調査は耕地整理事業に伴うもので、着工以前に実施されたため、調査の主眼を縦文早期生活遺構の究明に置いた。したがって、編集もこれに重点をおき、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本報告書の執筆および図版作製は次の通りである。

本文執筆者　友野良一，御子柴泰正，根津清志，清水英樹，小池政美，辰野伝衛，  
柴　登巳夫，保坂九市，長瀬康明，本田秀明，太田　保　（順不同）

### 図版作製者

- ・遺構及び地形実測図　柴　登巳夫，小池　政美
- ・土器拓影及び実測図　小池　政美
- ・石器実測図　根津　清志，柴　登巳夫

### 写真撮影

発掘及び遺物　清水　満

4. 本報告書の編集は主として、友野良一，小池政美があたった。

## 目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 環 境.....	(1~4)
第1節 位 置.....	(2)
第2節 地 形, 地 質.....	(2~3)
第3節 歴 史 的 環 境.....	(4)
第Ⅱ章 発掘調査の経過.....	(5~9)
第1節 発掘調査に至るまで.....	(5~6)
第2節 調 査 日 誌.....	(6~9)
第Ⅲ章 遺 構.....	(10~18)
第1節 焼石群(第1号~第3号) .....	(10~13)
第2節 住居址(第1号~第6号) .....	(14~18)
第3節 土 塚.....	(18)
第Ⅳ章 遺 物.....	(19~41)
第1節 土 器.....	(19~28)
第2節 第1号焼石群, 第3号焼石群出土土器.....	(28~37)
第3節 石 器.....	(38~41)
第Ⅴ章 ま と め.....	(42~46)

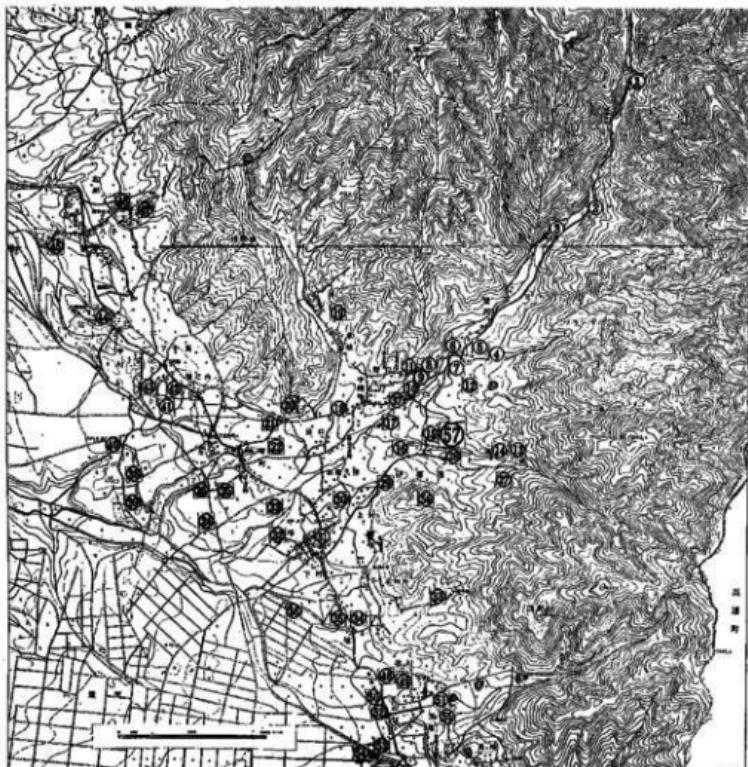
## 挿図目次

第 1 図 地形及び遺跡分布図 .....	(1)
第 2 図 遺跡地の模式地層図 .....	(3)
第 3 図 南型信州ローム層柱状図 .....	(3)
第 4 図 遺構配置図 .....	(10)
第 5 図 第 1 号焼石群実測図 .....	(11)
第 6 図 第 2 号焼石群実測図 .....	(12)
第 7 図 第 3 号焼石群実測図 .....	(13)
第 8 図 第 1 号住居址実測図 .....	(14)
第 9 図 第 2 号住居址、土塙実測図 .....	(15)
第 10 図 上第 3 号、下 6 号住居址実測図 .....	(16)
第 11 図 第 4 号、5 号住居址実測図 .....	(17)
第 12 図 第 1~2 群土器拓影 .....	(20)
第 13 図 第 2 群土器拓影 .....	(22)
第 14 図 第 2~4 群土器拓影 .....	(24)
第 15 図 第 4~6 群土器拓影 .....	(25)
第 16 図 第 7 群土器拓影 .....	(26)
第 17 図 第 1 号焼石群遺物分布断面図 .....	(29)
第 18 図 第 1 号焼石群遺物照合図 .....	(29~31)
第 19 図 第 1 号焼石群土器拓影 .....	(32)
第 20 図 第 1 号焼石群土器拓影 .....	(33)
第 21 図 第 1 号焼石群土器拓影 .....	(34)
第 22 図 第 1 号焼石群土器拓影 .....	(35)
第 23 図 第 3 号焼石群遺物照合図 .....	(35)
第 24 図 第 3 号焼石群遺物分布断面図 .....	(36)
第 25 図 第 3 号焼石群土器拓影 .....	(37)
第 26 図 石器実測図 .....	(40)
第 27 図 石器実測図 .....	(41)

## 圖 版 目 次

- 圖版 1 遺 跡 全 景
- 圖版 2 遺物出土狀況
- 圖版 3 遺物出土狀況
- 圖版 4 遺構（燒石群）
- 圖版 5 遺構（住居址，土塹）
- 圖版 6 遺構（住居址）
- 圖版 7 第 1~2 群土 器
- 圖版 8 第 2~4 群土 器
- 圖版 9 第 5~7 群土 器
- 圖版 10 第 1 号燒石群出土土器
- 圖版 11 第 1 号燒石群出土土器
- 圖版 12 第 1 号，第 3 号燒石群出土土器
- 圖版 13 石 器

# 第Ⅰ章 環 境



第1図 地形および遺跡分布図

## 遺 蹤 の 名 称

1 津 山	10 矢 塚	19 東 松	小百済毛	36 六 道 原	44 社 西 塚	52 林 越
2 ヨキトギ	11 野 口 塚	20 古 八 塚	28 近 溝	37 野 口 遺 蹤	45 島 畦	53 营
3 船沢桜林	12 金 山	21 錦 治 游 外	29 上 村	38 下 手 良 中	46 堤 林	54 土
4 ワランベ	13 竜 の 沢	22 中 原	30 社 宮 地	原	47 山 の 田	55 古
5 入 林	14 鳩 神	23 石 尾 堂	31 宮 の 平	39 大 原	48 神 手 原	56 城
6 大 上	15 山 伏 塚	24 二 十 平	32 砂 場	40 松 太 惣 道	49 日 向 塚	57 沔
7 獅 塚 外	16 九 山	25 地 神 原	33 清 水 溝	41 南 墓 外	50 笠 原 堂 墳	
8 鳥 ノ 宮	17 向 田 田	26 小 草 原	34 郡 の 坪	42 角 城	外 境	
9 社 塚 外	18 章 塚 外	27 大 百 済 毛	35 稲 の 木	43 墓 外		
			36	44	52	53
			37	45	53	54
			38	46	54	55
			39	47	55	56
			40	48	56	57
			41	49		
			42	50		
			43	51		
			44	52		
			45	53		
			46	54		
			47	55		
			48	56		
			49	57		
			50			
			51			

## 第1節 位 置

浜弓場遺跡は、長野県伊那市手良中坪山道田615に所在する。伊那市街より所在地点に至るには杖突街道を、高遠町方向へ約5kmほど行くと美郷区上原部落がある。ここで杖突街道と別れて左に折れ、北に向かって段丘斜面の林を上れば広々としたほぼ平坦な耕地が続く。末広部落を通過し、杖突街道と別れてから約25kmほどで手良中坪に至る。これよりさらに東に向かい、上村部落を通り抜けければ伊那山脈山麓に到着する。この山麓より延びる舌状の丘上に当遺跡は在する。北に柳沢川支流の瀧ノ沢川が流れ、南側は湧水のある凹地湿地帯を形成している。 (御子柴泰正)

## 第2節 地 形、地 質

木曾山脈と赤石山脈、赤石山脈の前山である伊那山塊(伊那山脈)との間に形成された伊那谷は、中央部を前述の山脈と併走する天竜川によって縱谷状地形となり、東・西側から流出する多くの支流によって、堆積、浸蝕、運搬がなされ、大小様々な扇状地、河岸段丘、渓谷が発達している。また、伊那谷に発達する段丘の中で、上位ほど古いという定義のあてはまらない特異な段丘もある。

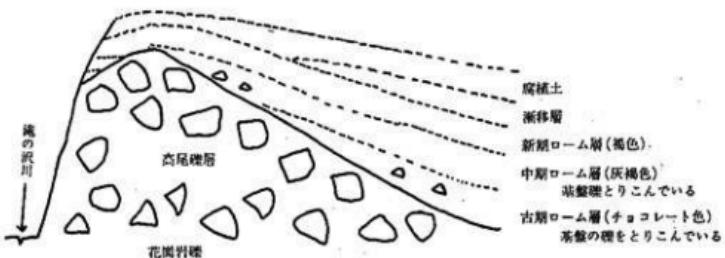
伊那市付近も、小沢川、三峰川の支流の外に、小さないくつかの支流によって、扇状地、河岸段丘が形成され、河岸段丘は西側に5段(ロームの堆積状態で分類)、東側に8段(ロームの堆積状態で分類)と形成されている。

\*本遺跡は、伊那山脈を源とする。瀧ノ沢川、柳沢川によって形成された河岸段丘の中で、古い段丘上に展開された遺跡で標高790mである。この古い段丘は、伊那谷において高尾段丘と呼ばれるもので、塩嶺面(伊那谷形成時代の物)について古い段丘である。

また、遺跡は、同じ基底疊岩層(高尾疊層)を持つ、北西方向に丸山城、南西に城山と呼ばれる(第1図)、万頭型の丘陵にかこまれ後背地は伊那山脈となっている。また、遺跡付近は城軒屋敷と呼ばれ、城軒屋という屋号を持つ家があり、すぐそばに山伏塚が存在する。

遺跡地の展開する高尾段丘は、美すずの天神山を形成した時代に次ぐ古い段丘で、伊那谷の河岸段丘は、古い方から、塩嶺面、高尾面(I・II)、大泉面、神子柴面(I・II)、南殿面、木ノ下面(I・II・III)と発達している中の、高尾面に相当する面、段丘である。

遺跡地付近は、鮮新世の所産である凝灰角疊岩層(火山性の灰、安山岩、その他異種の入りこんだ岩層)か伊那山脈の花崗岩が基盤となり、その上に高尾疊層(遺跡地域では、後背山地である伊那山脈から運搬された花崗岩のくさり疊層)が堆積し、さらに御岳火山に起源を持つ、南信州型ローム層(第3図)が風成で堆積した。このローム層は、厚いところでは11~13.5mになっているところもある。また、このローム層は、三層に分類され、下部から、古期・中期・新期ローム層と呼ぶ。中期ローム層は、神子柴段丘面を形成した。神子柴疊層と同時層であり、新期ローム層と一部同時層は、南殿・木ノ下段丘面を形成した。南殿疊層、木ノ下疊層I・II・IIIである。また、高尾面を形成した高尾疊層と一部同時層となるローム層は、古期ローム層である。なお、古期ローム層中には6枚、中期ローム層中に5枚、新期ローム層中には2枚の浮石層が夾在する。これら浮石の多くは、放射年代が判明している。遺跡に關係する、新期ローム層中の古い方の浮石の放射年代



第2図 遺跡横式地層図

は27,800年±500年とされている。

遺跡地は、伊那山脈の花崗岩を基盤となし、その上に棚沢川、滝ノ沢川によって運搬され堆積した高尾疊層によって形成された丘陵地で、南西に傾斜し、北東に殆んど傾斜をもたない丘陵地で、この丘陵地の北側は滝ノ沢川によって浸蝕され、高尾疊層の露出をみる。なお、高尾疊層の完全な露出は、南方800m位のところ清水庵の壁にみられる。この疊層の上位に古期ローム(チョコレート色)が堆積し、中期ロームが降灰堆積するまでに時間的間隙があり、風化され一部が残り、その上に中期ロームが降灰し堆積し、新期ロームが降灰するまでに時間的間隙があり、風化され一部が残り、新期ローム層の降灰があり第2図のように遺跡地の地層を完成したものである。もしこの丘陵が南西傾斜を持たない平坦な丘陵ならば、相当厚いローム層が堆積されたと考えられる。

遺物は主として、漸移層と新期ローム層との境から出土する。

(清水英樹)



第3図 南型信州ローム層横式柱状図

### 第3節 歴史的環境

伊那市東部における天竜川左岸地域は、天竜川による河成段丘と、三峯川と棚沢川による合流扇状地から成り立ち、その上を厚いローム層が覆っている。この段丘平面はほぼ三角形をした地形とみることができ、まずその東西辺は、三峯川により開析された一辺で、美篶天神山(808m)から伊那公園まで約5.7km、南北辺は天竜川による河成段丘で、伊那公園から箕輪町卯ノ木付近まで約5.5km。また天神山と卯ノ木を結ぶ線は、伊那山脈山麓で約5.5kmの一辺を有している。この三角状台地の遺跡分布をみると、まず三峯川と天竜川の段丘上、そして伊那山脈山麓で、この三角地形台地の三辺に当たる部分と、その垂線ともいべき棚沢川周辺に濃密な遺跡の点列分布帯をみることができる。また標高は天竜川にのぞむ段丘上690m台に、弥生時代から平安頃までの遺跡、爪ヶ崎、上牧神社上(押型文)、長者屋敷、上牧、福島等の火遺跡が隣接し、また40基に近い牧、福島古墳群がこの一辺に集中している。さらに720mから790mの間が、伊那山脈山麓分布地域で、手良に点在する大半の遺跡はこの中にに入る。これらの遺跡を抱合するほぼ平坦なこの三角状台地は通称六道原と呼ばれ、古来より美篶地区の一部に六道地蔵尊が祀られている。手良の地名が歴史上に登場するのは伊那地方では最も古く、平安時代承平5年(935年)倭名類聚録に手良郷が初見され、また手良の地名についても、古来より手良公と称する帰化人が居住していたと伝えられており、それを裏付けることなく当遺跡北を流れる龍の沢川の上流には、大百済毛、小百済毛と呼ばれる二つの地名が残っている。手良に散在する遺跡数は、約50箇所に達するが、その殆んどが棚沢川による扇状地形上に存在する。棚沢川は伊那山脈鉢伏山(1,455m)に源を発し、全長約9kmをもって福島部落にて天竜川に合流する。その間この扇状地は山麓特有的湧水による微開拓により湿地帯凹地面と舌状丘陵面とを數多く形成し、この舌状丘陵は絶好な居住性に富み、先史原史はもとより、古代高地性農耕文化としての村落形成にも理想的な地形である。浜弓場遺跡もその地形的条件を備えた好一例である。手良における繩文早期遺跡としては浜弓場の他、所洞、ワランベ、松太郎窪の三遺跡が上げられ、伊那山地山麓を北に迫れば、箕輪町卯ノ木に上金、澄心寺下、同三日町に栗飯、城近、董野と押型文遺跡が続き、南に下れば三峯川を越え北福地の三ツ木があり、さらに田原の駒形、宮ノ上と点在していく。また手良付近における注目すべき遺跡としては、繩文中期主体の所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、孤垣外、松太郎窪等が見られ、晚期には火葬墓とみられる野口遺跡が存在する。また南垣外からは灰釉長頸瓶と人骨が出たと伝えられており、さらにこの南垣外から棚沢川に沿って福島地籍まで約1.5kmの広大な面は、手良郷の所在地と目されている福島遺跡が続く。なほ笠原堂垣外からは、古式土器の良好なセットと住居址が露呈し、また古墳としては矢塚、山伏塚の二基が近くに存したが、共に現在は消滅した。特に山伏塚については、戰前までその付近から出土した石斧や石製品を8~9本立てて、雁高大明神として祀り、またその道の病を得た者が治癒すると、鐵や石製品を奉納し、かなりの信仰を集めたと伝えられている。現在は水田となり、石製品の一郎と雁高大明神の碑が本郷千春氏宅に祀られている。また浜弓場遺跡南の貯水用堤を造った時、夥しい人骨がその湿地より出土したと伝えられている。さらに中世と思われる時期の館跡が丸山にあったという城山も物見跡とされている。

(御子柴泰正)

## 第Ⅱ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

昭和46年3月初旬、市教育委員会は伊那市手良在住の市議会議員神林賛三氏と向山幸人氏の二氏より、両氏所有の畠地約4,000千平方mのローム堆積土を約2m除土したいとの連絡をうけた。それと同時に神林氏より、その地点に縄文時代早期に属すると思われる押型文土器片が出土しているとの提言があったので市教育委員会では土地所有者神林賛三、向山幸人の両氏と市文化財審議委員那須野伍輔、御子柴泰正の各氏が現地の状況調査を行なった。その結果両氏により、横円押型文土器片數片と縄文中期中葉の土器片を採集した。これによりこの地点が、縄文時代早期遺跡としての重要な意義のある点を認めたので、市教育委員会と土地所有者の二氏と話し合った結果、二氏とも畠地2mの除土は是非実行したいとの要望もあり、現状保存は不可能との結論に達したので市教育委員会は二氏の協力を得て採土を一時延期して貰い、その地点の遺物包含状態及び遺構についての認知のため、トレンチ及びピットによる分布調査を行なうことになった。

昭和46年3月24日、25日の2日間に亘って分布調査した結果、遺跡全域に横円押型文土器片を見る事ができ、特に分布の濃い地点からは田戸下層式に比定されるものと思われる土器片もかなり出土し上伊那地方として非常に重要な新知見を得た。また、住居址として石蓋付埋甕を有する住居址1とカマドを有する土筋式住居址1を確認した。

この結果、発掘調査を必要とすることが関係者一致し発掘調査に要する諸々の打合せをし、市教育委員会は県教育委員会を通じて文化庁に発掘調査費の補助を要請してきた。この間調査員の諸氏及び県教育委員会担当者、上智大学教授八幡一郎先生、豊博謙先生方の現地視察され、この遺跡の重要性を語られていた。

昭和47年9月12日付で県教育委員会の補助金内定通知があり、ここに正式に浜弓場遺跡発掘調査の態勢が出来た。

昭和47年10月11日第1回準備打合せ会 伊那市役所会議室

出席者 松沢教育長、保坂課長補佐、中村主事、林茂樹、友野良一、根津清志、御子柴泰正、福沢幸一、小池政美、清水満、辰野伝衛、宮沢恒之の各氏

協議事項 浜弓場遺跡発掘調査について (1) 経過報告、(2) 発掘日程について、(3) 調査員の編成について、(4) 作業員の配置について。

10月26日 調査委員会 市役所

出席者 松沢教育長、保坂課長補佐、中村主事、神林賛三、那須野伍輔、松沢新右衛門の委員  
協議事項 浜弓場遺跡発掘調査について

11月22日 調査団打合せ会 伊那公民館

出席者 松沢教育長、浦野社会教育課長、保坂課長補佐、友野良一、根津清志、御子柴泰正、福沢幸一、小池政美、辰野伝衛、清水満、長瀬康明の各調査員

協議事項 浜弓場遺跡発掘調査について

浜弓場遺跡発掘調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育長
副委員長	有賀京一	伊那市文化財審議委員長
委員	向山雅重	長野県文化財専門委員
"	木下斯	上伊那教育会長
"	神林梵三	伊那市市議会議員
"	向山幸人	土地所有者
"	那須野伍輔	伊那市文化財審議委員
"	松沢新右衛門	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
	保坂九市	伊那市教育委員会社会教育課長補佐

浜弓場遺跡発掘調査団

顧問	林茂樹	日本考古学协会会员
团长	友野良一	"
副团长	御子柴泰正	長野県考古学会会员
調査員	根津清志	"
"	小池政美	"
"	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
"	理学博士清水英樹	日本地質学会会员
"	清水潤	長野県考古学会会员
"	福沢幸一	"
"	太田保	"
"	本田秀明	"
"	長瀬康明	"
"	柴登己夫	"

第2節 調査日誌

11月29日 御子柴副团长、小池調査員両氏が現地調査を行ない、発掘調査区域を決める。

11月30日 遺跡にブルドーザーを入れて、耕土を剥ぎ取る。約4反歩程を午後4時までかかって終了する。午後より発掘器材の運搬準備にとりかかる。



12月1日 グリットを設定。名称は全体をA区とB区に分け、AA 20を起点とし、西へ行くほどB、C……Y)、南へ行くほど数字を増し、北へ行くほど、それを減じていく。

12月2日 午前9時、浜弓場遺跡現地に集合し、結団式を行ない。その後直ちにAA 20 グリットより掘り始める。AC 20, AB 19に集石を検出、付近一帯を拡張した結果、最終的に流石と判断される。30 グリットを掘り、各グリットから縄文中期片多数出土。

調査員 8名 事務局 10名

作業員 21名

12月3日 土居調査の為に、AO



ラインを4カ所ほど掘り始める。AO 17に落ち込みを検出、これを第1号住居址、AO 9に同じく落ち込みを検出、これを第2号住居址とする。(AK 20 ~ AK 21), (AL 20 ~ AL 21)にかけて、焼石群が存在し、これを第1号焼石群とする。付近より、押型文、田戸片が10数片出土、押型文の出土層位を調査するために、通し番号を利用し、レベルをおとす。本日は(1番~

13番まで)

調査員 6名 事務局 8名 作業員 23名 南箕輪小学校生徒 25名

12月4日 第1号住居址と第2号住居址のプラン確認のために拡張し、それらを掘り下げる。第1号住居址のすぐ隣に、焼石群を検出、これを第2号焼石群とする。

第1号焼石群の一帯(AK18~AM18), (AK19~AM19)を掘り下げる。本日は(14番~30番まで)。

調査員 5名 事務局 10名 作業員 26名

12月5日 第1号住居址と第2号住居址の清掃と写真撮影をすませる。第2号住居址内に土塙を検出。

B地区に20カ所グリットを掘るが、めぼしい遺物はない。第1号焼石群の通し番号は(32番~91番まで)。

調査員 5名 事務局 16名 作業員 30名

12月6日 第1号焼石群の付近を掘り下げる。通し番号は(92番~164番まで)。

(BA9~BA10)にかけて炉を発見、桑烟であったために搅乱されてしまつて、炉だけ残存している状態である。これを第3号住居址とする。AY21に落ち込みを発見、付近を拡張してみると、切り合っているようである。

これを第4号住居址、第5号住居址とする。

BK16に焼石群を検出、これを第3号焼石群とする。午前中、県文化課金井係長来遺  
調査員 5名 事務局 10名 作業員 30名

12月7日 15カ所グリットを掘り下げる。第3号焼石群付近のグリットを拡張、第1号焼石群の通し番号は(165番~254番まで)。

第1号住居址、第2号住居址、土塙の実測。

BE17付近に炉を検出、これを第6号住居址とする。搅乱されてしまつて、炉だけ存在していた。

調査員 7名 事務局 7名 作業員 35名

12月8日 第1号焼石群周辺のグリットをローム層まで掘り下げる。通し番号は(255番~265番まで)、第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址の清掃をする。

調査員 6名 事務局 7名 作業員 30名

12月9日 第1号焼石群と第2号焼石群の仕上げを行ない、写真撮影を完了する。

AM18~AM22の地層の実測、第3号焼石群の遺物分布図を作製、本日をもって発掘作業を終了する。

調査員 7名 事務局 8名 作業員 30名

12月11日 第3号焼石群の清掃、写真撮影、ならびに実測。

調査員 2名 事務局 2名 作業員 2名

12月12日 雨のために土器洗浄を行なう。

調査員 1名 作業員 2名

12月13日 第2号焼石群の水糸張りと平面実測。

調査員 2名

12月14日 第2号焼石群の平面実測、断面実測、第1号焼石群の平面実測。

調査員 2名

12月15日 第1号焼石群の平面実測、断面実測。

調査員 2名

12月16日 第3号、第4号、第5号、第6号住居址の実測。

調査員 1名 作業員 1名

12月17日 地形図の作製。

調査員 1名 作業員 2名

12月19日 後かたづけを完全に終了する。

調査員 1名 事務局 2名 作業員 2名

12月20日～25日 福祉センターにて土器の洗浄と注記を行なう。

12月26日～28日 土器の分類を行なう。

1月5日～13日 拓本取りを行なう。

1月14日～27日 図版作製を行なう。

1月28日～2月16日 原稿書きを行なう。

2月19日～2月25日 編集を行なう。

(保坂九市)

#### 参加者名簿

教育委員会側から

三沢係長、根津主事、北原主事、有賀技師、山崎主事、竹内主事、中村主事、向山文司、那須野伍輔  
(順不同)

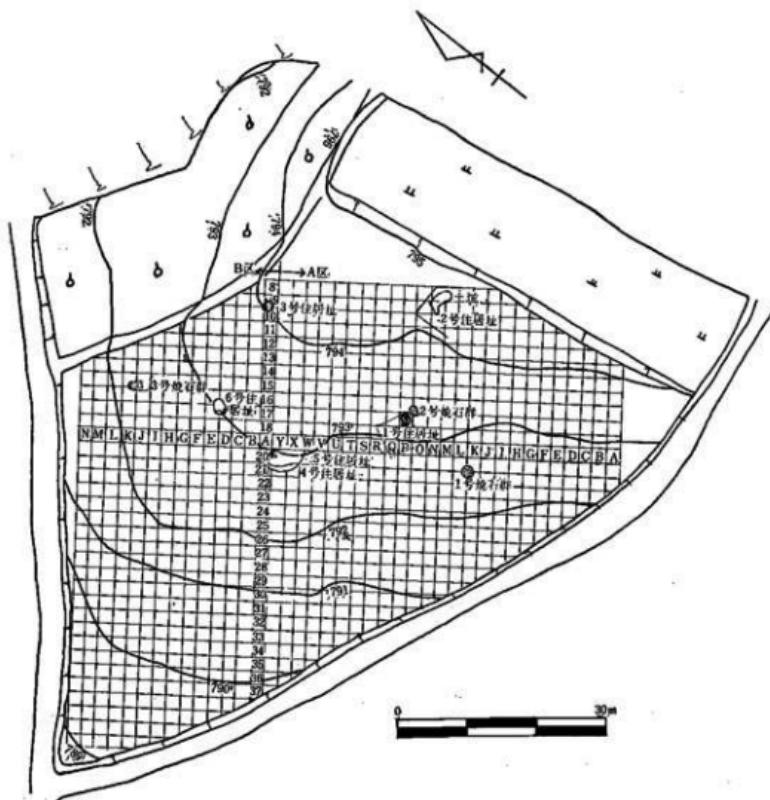
公民館側から

城倉主事、白鳥主事、池上主事、矢沢主事、林主事、米山主事、橋爪主事、登内主事 (順不同)  
作業員側から

竹内千代、蟹沢幸子、蟹沢文子、蟹沢すみ江、登内かずゑ、矢沢涼子、矢沢八重子、名和正子、  
竹内けさゑ、伊藤喜代子、伊藤タマキ、登内利一、三沢利春、白鳥武、酒井伊重、伊藤よしの、  
羽柴晶子、名和庄平、北原波寿男、松島ひで子、八木徳雄、菊島君子、菊島要一、武田久雄、氣  
島知徳、牧田政園、北原一喜、後藤つたゑ、蟹沢千勝、下平みちゑ、竹内こやえ、松沢ことゑ、  
蟹沢智佐登、蟹沢米子、蟹沢美千代、酒井修理、宮原英行、向山茂人、向山富也、北原哲三、蟹  
沢敏啓、白旗善秋  
(順不同)

## 第Ⅱ章 遺構

### 第1節 焼石群



第4図 遺構配置図



第5図 第1号焼石群実測図

#### 第1号焼石群（第5図、図版4）

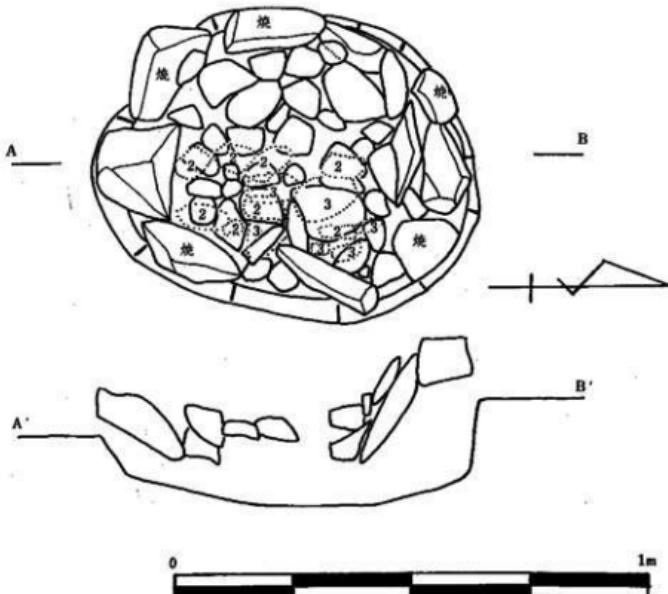
(AK 20～AK 21), (AL 20～AL 21)にかけて礫群が検出された。

礫群は80個以上の角礫あるいは円礫から成り、大きさは平均して、拳大から人頭大ほどである。これらの礫群が漸移層面に沿って、南北1m60cm、東西1m40cmほどの範囲に橢円形に敷きつめられており、橢円形状の外周に人頭大位の石が散在的に検出された。

断面図でみるとわかるように、部分的には礫が三段になっており、一段目の石は漸移層の上層、二段目のそれは同層の中層、三段目のそれは同層の下層に含まれる。漸移層の中にわずかであるが、焼土と炭化物を認めることができた。礫の数いてある層（漸移層）、あるいは周辺の土は、マウンド状のタタキになっていた。

石は大部分が変成岩で、中には花崗岩も含まれていた。花崗岩は一度火を受けて、冷却したために割目が著しく入っている。

その他、火を受けて赤く変色した石も數個認められた。遺物は焼石群の周辺より、押型文土器、田戸式土器片が、265点出土しているが、焼石群内よりは漸移層の中層より押型文(第22図(141)、図版11)が1点出土したのみである。実測国内の漢字の焼は焼石を、また算用数字の2は2段目の石、3は3段目の石をそれぞれ意味している。この方法は第2号焼石群、第3号焼石群も同様である。



第6図 第2号焼石群実測図

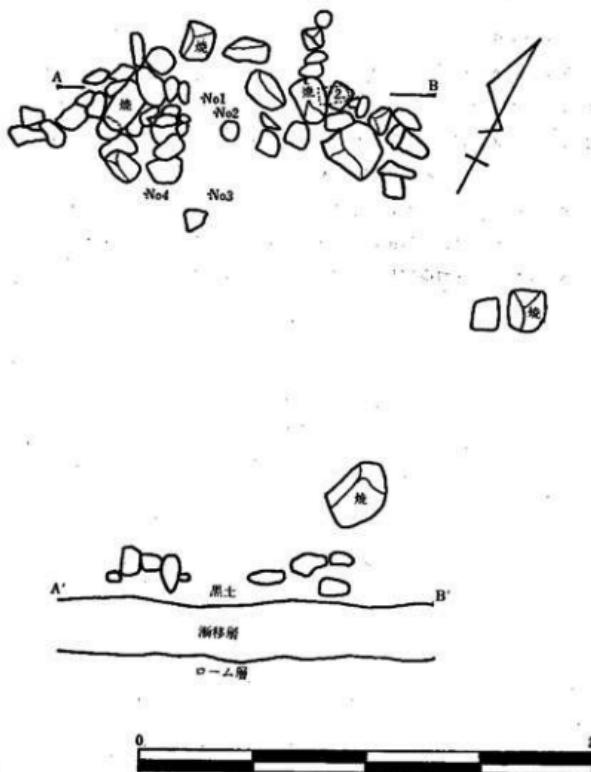
#### 第2号焼石群(第6図、図版4)

(AO16~AO17), (AP16~AP17)にかけて、礫群が検出された。

礫群は50個以上の角礫や円礫から成り、大きさは平均して拳大から人頭大ほどである。なかには長さが30cmを越えるものも数個存在している。礫群はローム層面に沿って、南北80cm、東西65cm位の範囲に梢円形状に敷きつめられている。配列状態は外側に大きな石をちょうど炉をつくるような状態で組み、そのなかに小さな石を置いてある。

断面図でみるとわかるように、外周の大きな石は幾分なりとも外に向けて傾斜をしているようである。礫の下は幾分すりぼち状に落ち込み、床面はわずかなタタキになっていた。覆土中より微量の焼土と炭化物を検出。石は部分的ではあるが三段組状になり、大部分変成岩で、火を受けたのはすべて外周の大きな石であった。

周辺から橢円押型文がわずかに出上しているが、覆土内からは全くない。



第7図 第3号焼石群実測図

#### 第3号焼石群(第7図、図版4)

(BJ 15~BJ 16), (BK 15~BK 16)にかけて、礫群が検出された。

礫群は50個以上の角礫あるいは円礫から成り、大きさは平均して握り拳大から人頭大ほどである。これらの礫が黒土層面に沿って、南北90cm、東西1m80cm位の範囲に広がっている。断面図でみるとわかるように、部分的には礫が二段になっており、下段のそれは黒土層の下層に位置している。礫の置いてある黒土層面は若干堅くなっている。また同層の下層より少量の炭化物や焼土が検出された。礫は大部分が变成岩で、なかには花崗岩や硬砂岩も数個含まれていた。礫の中には火を受けて赤く変色したものや、熱を受けて亀裂の入ったのも少なからずみとめられた。

遺物は礫群の周辺に押型文や田戸式の土器片が相当量分布していたのに対し、礫群の中からは、橢円押型文の細片が数点出土したのみである(第25図(32~36)、図版12)。(小池政美)

## 第二節 住居址

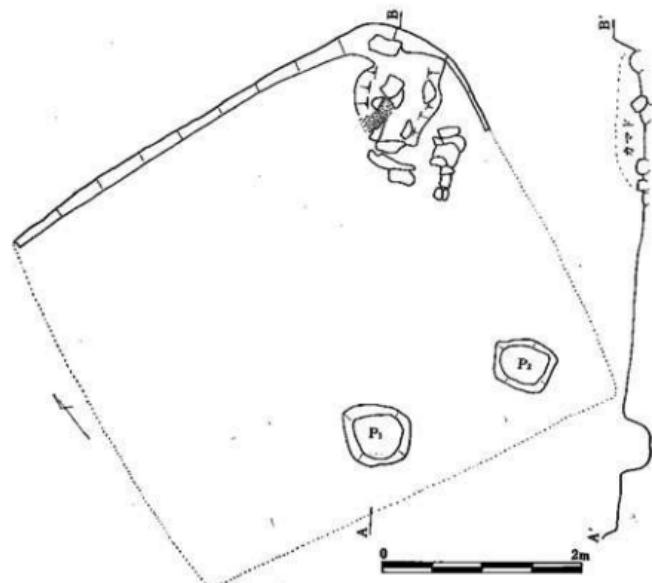
### 第1号住居址（第8図、図版5）

この住居址はローム層を掘り込み、推定、南北4m50cm、東西5mほどの隅丸方形プランを呈する堅穴住居址である。壁高は北は20cm、東は10cm位で、西と南は搅乱のために原型を留めていない。床面はローム層を固くたたき、良好である。柱穴は直径60cm前後、深さ30cmのものが2ヶ所発見されただけであるために配列状態は不明である。

カマドは北東の隅に構築され、石組粘土カマドである。その形状は、かなりくずれてしまっております。石組に使用された石は付近に散乱している。石質は大部分が花崗岩である。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器片が少量出土したのみである。

（長瀬康明）



第8図 第1号住居址実測図

### 第2号住居址（第9図、図版5）

この住居址はローム層を掘り込み、推定、南北6m、東西6mほどの隅丸方形プランを呈する堅穴住居址である。東側と南側は桑耕作のために擾乱されてしまって、壁らしきものは全く残存していない。

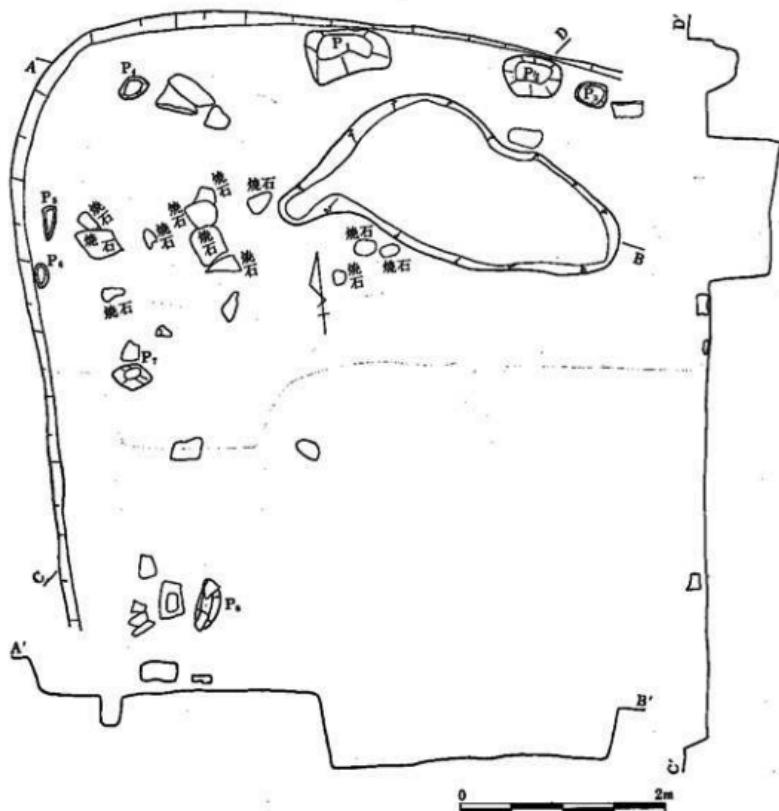
壁高は西で30cm、北で25cmほどを呈し、全般的に不良の状態である。

床面はわざかなローム層のタタキで、多少の凹凸を認めるが、全般的には水平である。

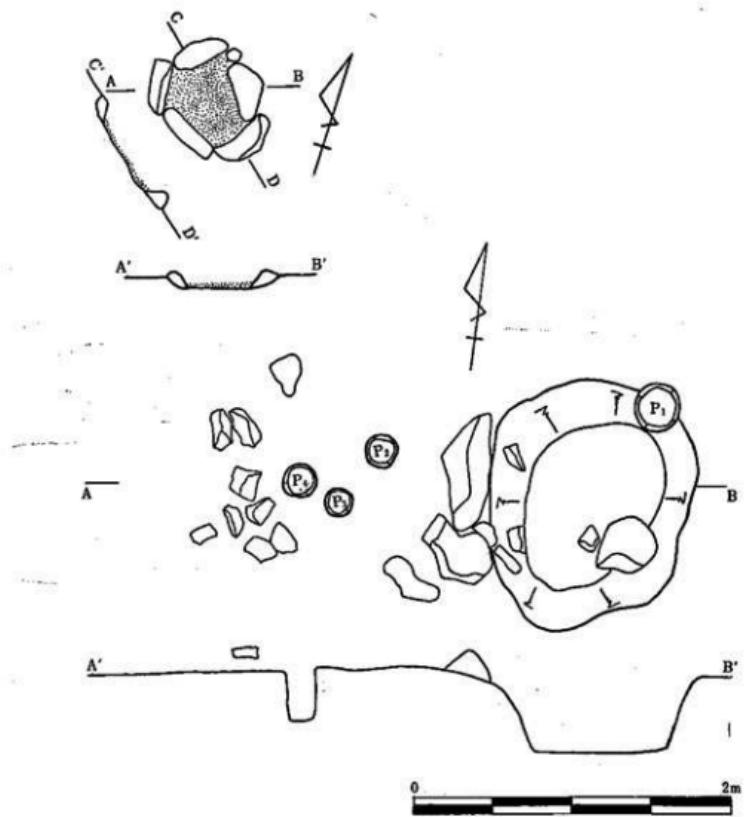
柱穴は北壁に沿って、直径30cm～70cmほどのものが、ほぼ一直線状に、また西壁に沿って直径35cm前後のものが、ほぼ等間隔に、それぞれ配列されている。

遺物は床面上より土師器、須恵器、灰釉等の破片が少量検出された。遺物から判断して、カマドの存在は当然であるが、この住居址ではカマドらしきものは全く発見されなかった。しかし、土塙の近くに数多くの焼石を検出した。おそらくこれがカマドに使用されたのが、散乱したのではないかと思われる。

北東の床面上に土塙が検出された。くわしくは第3節土塙で述べるとしよう。 (本田秀明)



第9図 第2号住居址、土塙実測図



第10図 上 第3号、下 6号住居址実測図

#### 第3号住居址（第10図）

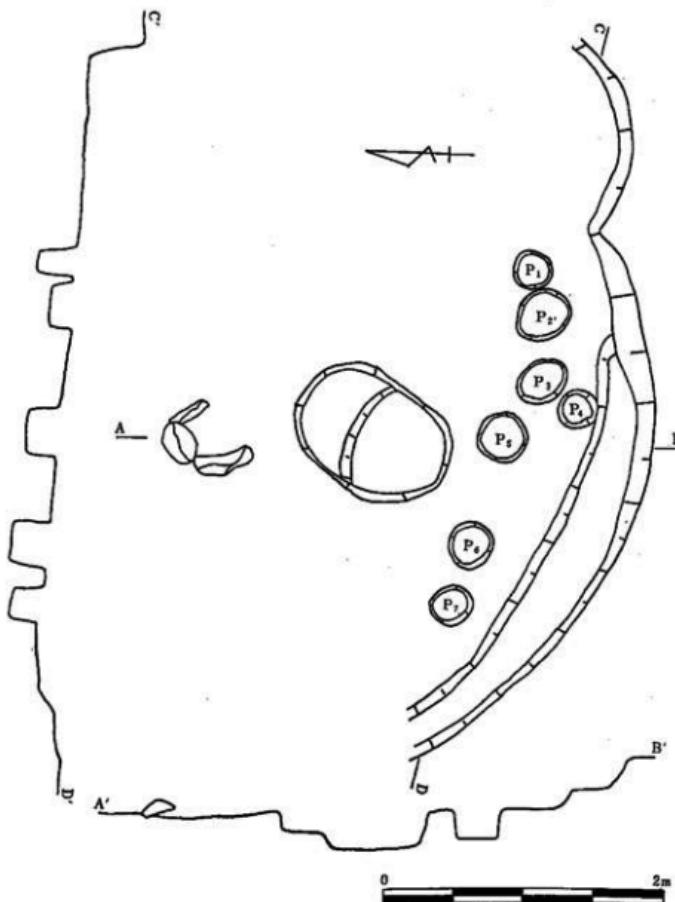
第3号住居址は（BA 9～BA 10）より発見されたもので、推定円形プランで4m内外のものである。表土と覆土層が流出と攪乱のため荒れている。遺構は不明のところが多い。

床面の一部はよく残存しているが、東はわずかに傾斜している。炉址は中央より北と思われる所にあり、その規模は東西80cm、南北70cm、深さ15cmの深いもので、30cm×10cmほどの河原石5個と、10cmほどのものの1個を組み合わせて配置し、炉縁石となす。内部よりは焼土と少量の木炭が検出され、繩文中期加曾利E式の土器片が出土した。遺物は床面上より少量の土器片と打製石斧の破損せるものが2個出土したのみである。（太田 保）

第6号住居址（第10図、図版6）

第6号住居址はBE17付近に発見されたものであるが、黒土の流出と耕作による擾乱のため、遺構は完全に発掘する事が出来ず、炉とピットのみに留まった。

炉址は南北160cm、東西130cm、深さ50cmほどを呈し、床下を摺鉢状に掘り込んだ縄文中期特有のものである。炉縁石は西側に、70cm×30cm、40cm×35cmのものと、東側中段傾斜部分に25cm×20cm大のもの等、2個のみ残存している。炉の内部よりは縄文中期の土器片多数と焼土、炭化物が検出された。



第11図 第4号、5号住居址実測図

炉址より西側に、直径 15cm、深さ 30cm 大のビットが、3カ所不整然にあり、20cm 大の自然石が 9 個散乱している。炉の付近の床面は固くたたいてあり、良好である。推定するにプランは円形にて相当大きなものと思われる。遺物は炉の内外より縄文中期の加曾利 E 式土器片と、床面上より打製石斧等出土した。

(根津清志)

#### 第 4 号住居址（第 11 図、図版 6）

第 4 号住居址は第 5 号住居址と重複して検出されたもので、南側の一部のみである。円形プランをなす竪穴住居址で、推定直径 5m 内外と思われる。壁高は南東で 30cm ほどあり、ほぼ垂直に近い。床面は概して良好であるが、一部搅乱により軟弱の所あり、北へわずかに傾斜している。

遺物は履土の褐色土層より、椭円押型文の土器片が少量出土、床面よりは勝坂式土器片小量と打製石斧等が出土した。

(根津清志)

#### 第 5 号住居址（第 11 図、図版 6）

第 5 号住居址は第 4 号住居址の中心部を掘り込んだ円形プランの竪穴住居址で、南側一部のみ検出された。推定直径は 6m 内外と思われる。壁高は東で 40cm ほどあり、垂直であって状態は良好である。床面は多少の凹凸を有し、固くたたいてあり、北へわずかに傾斜している。柱穴は南壁寄りに、径 25cm より 35cm のもの 7ヶ所で、深さは 30cm 前後ある。この柱穴は 1 列に並んでいるが、第 4 号住居址のものもあるのではないかと思われる。ビットは中央より西側に長軸（南北）115cm、単軸 85cm ほどであり、底部は段付状を呈しており、深い方は床面上 40cm で、浅い方は 20cm である。

炉址は中央北寄りの所へ、30cm×20cm 位の河原石を礎として、40cm×15cm、30cm×10cm のを 2 個組んで炉縁石としてある。内部よりは、わずかな焼土を検出した。

遺物は床面上より加曾利 E 式土器片と打製石斧が数点出土した。

(根津清志)

### 第 3 節 土 塙

#### 土 塙（第 9 図、図版 4）

土塙は第 2 号住居址の北東床面に検出されたものである。床面を掘り込み、南北 1m 50cm、東西 3m ほどの規模を有し、椭円形状のプランを呈している。壁高は 50~70cm ほどあり、ほぼ垂直状態を示している。床面はたたきらしきものは全く存在せず、遺物は床面より中世の内耳土器が 1 片出土している。遺物から判断して、第 2 号住居址よりも新しいことは明確である。（辰野伝術）

## 第Ⅳ章 遺 物

### 第1節 土 器

#### 第1群土器（第12図(1), 図版7）

いわゆる斜繩文土器を一括して第1群土器とした。1は内そぎの外反する口縁部破片で、厚さは4mm～5mm程度で、薄手につくられている。胎土に雲母を含み、茶褐色で、焼成は割合に良好である。

#### 第2群土器（第12～第14図（2～105）、図版7～8）

いわゆる回転押型文土器を一括して第2群土器とした。発掘された第2群土器は数量が最も多く、文様構成からして、次の6類に分けられる。

##### A類 山形押型文（第12図（2～20）、図版7）

主として山形押型文だけが施文された土器を意味している。胎土は全般的に雲母を含み、焼成は良好である。色調は一般に茶褐色を呈し、なかには黒褐色もある。

2は外反する口縁部破片で、縦位と横位の山形文が組み合わされており、桶沢式に類似する。

(3～7)は山形文が純角で、施文帯はそれぞれ4mmほど(3), 3mmほど(4), 1mmほど(5)である。

5は陽刻面と陰刻面が1対2の割合で施文されている。(6～7)は波長が長い。

(8～10)は山形文が銳角で、施文帯が4～5mmほどあり、広い部類に属していると思われる。

(11～15)は銳角で陽刻面と陰刻面が、ほぼ1対1の割合で施文されているもの。

(16～18)は銳角で、輪が細い。(16～17)は内そぎの口縁部破片で、外反している。

(19～20)は丸味を呈する山形文で、山形文自体も太くて粗い。20は器壁が約1cmで厚い。

##### B類 格子目押型文（第12図（21～30）、図版7）

胎土に細かな砂粒や雲母が破片の大部分に含まれ、焼成は全般的に中位である。色調は黒褐色と茶褐色が半々ほどであり、厚さは5mmから8mm程度で、中厚手から厚手に属している。

(21, 23～24)は一辺が4mmの小さな平行四辺形状の格子目である。

22は外反する口縁部で、左から右さがりの刻目を入れてある。色調は黒褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好である。

(25～26)は一辺が5mmほどの正方形状の文様を、不規則に井桁状に組み合わせてある。

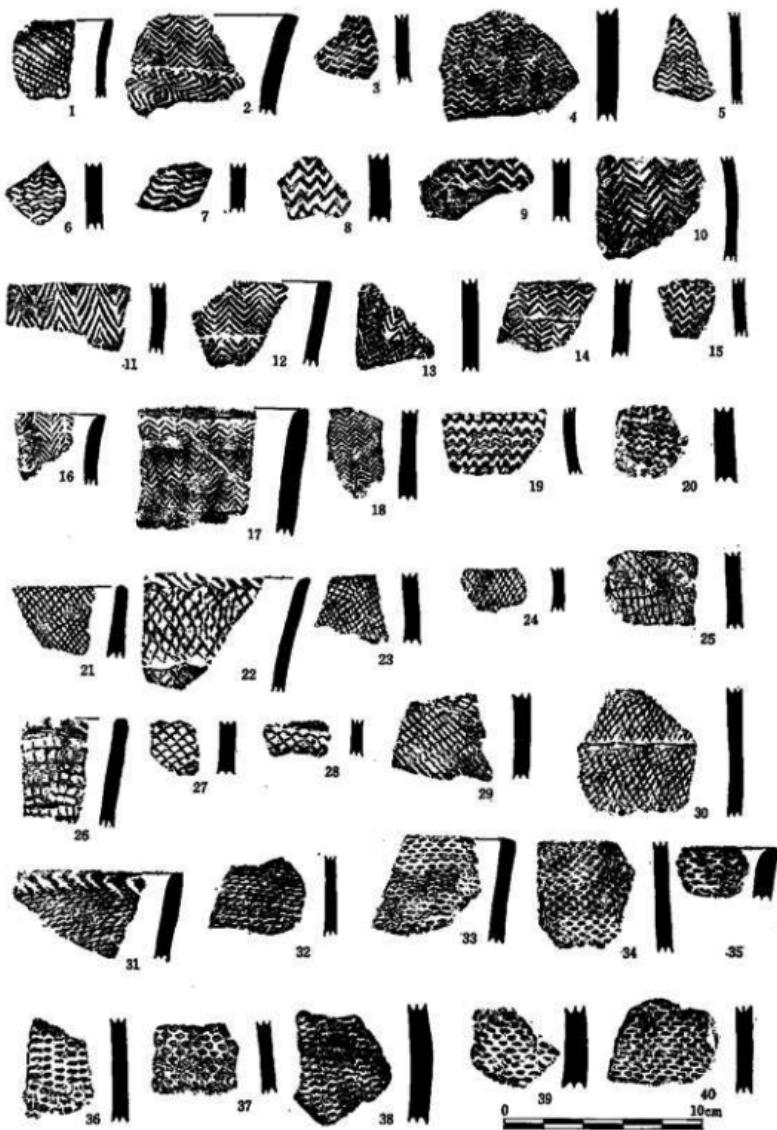
(27～28)は一辺が5mmほどの大き目の平行四辺形状の格子目である。

(29～30)は内面に横位の擦痕を有してある。29は一辺が割合に長く、配列には規則性がある。

##### C類 槌円押型文（第12～14図（31～91）、図版7～8）

(31～32)は穀粒状の橢円を逆（陰刻）に押捺し、また31は口縁部に沿って竪状工具による粗大爪形文を施してある。色調は黒褐色(30), 黄褐色(32)を呈し、雲母を含み焼成は良好である。

(33～43)は米粒大から小豆大ほどの橢円を横位に、規則正しく配列してある。



第12図 第1~2群土器拓影

胎土中に大部分雲母を含み、焼成は中位で、色調は黒褐色（33～35）、茶褐色（36～43）を呈している。38は部分的に炭化物が付着しているために黒くなっている。

器型は細片であるが故に、詳かにできないが、口縁部破片はすべて外反し、（33、43）は外そぎ、35は内そぎの形態を明示している。

（44～49）は米粒大から小豆大ほどの楕円を縦型、あるいは斜目に規則性を有している。

胎土に雲母（44～46、48）石英（47）、長石（49）を微量含み、焼成は全般的に良好であり、なかでも、44は極めて良好。

色調は黒褐色（45～46、49）、赤褐色（44）、茶褐色（47～48）を呈し、厚さは7mmから9mm位である。

（50～54）は楕円文が穀粒状、または筋鉢形を成し、方向が不規則に施文されている。

色調は茶褐色と黒褐色が半々を占め、雲母、長石を微量含み、焼成は良好である。

（55～75）は比較的粗大な楕円が横位や不規則な方向に配列されている。

色調は茶褐色（57～58、60、63～71、75）、黒褐色（55～56、59、61～62、72～75）を呈し、胎土に大部分雲母、長石を含む。（59、64～65）の内面に擦痕が横位に施されている。

焼成は中位（65～66）、良好（55～64、67～75）である。一般的に口縁部はわずかに外反する傾向を示し、（57～59）は内そぎである。

（76～79）は大粒の楕円で丸型に近似している。

（78～79）は口縁部破片であり、外反し、78は縦形台形状のいわゆる補修孔が穿され、79は口唇部が非常にフラットにつくられている。

色調は黒褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好である。

（80～82）は若干角張った楕円が押捺されている。80は小粒でソロバン玉状に、（81～82）は大粒で方形状に、それぞれ施してある。

色調は黒褐色を呈し、雲母を多量に含み、焼成は良好である。

（83～87）は内面に横位の擦痕を無数に配し、纖維を含んでいるもの。

色調は茶褐色（83～86）、赤褐色（87）を呈し、焼成は全般的に不良である。

88は穀粒状の楕円を不規則に両面押捺してある。色調は黄褐色を呈し、胎土中に雲母、3～4mmの長石粒を多量に含み、焼成は粗雑で、ぼろぼろしている。

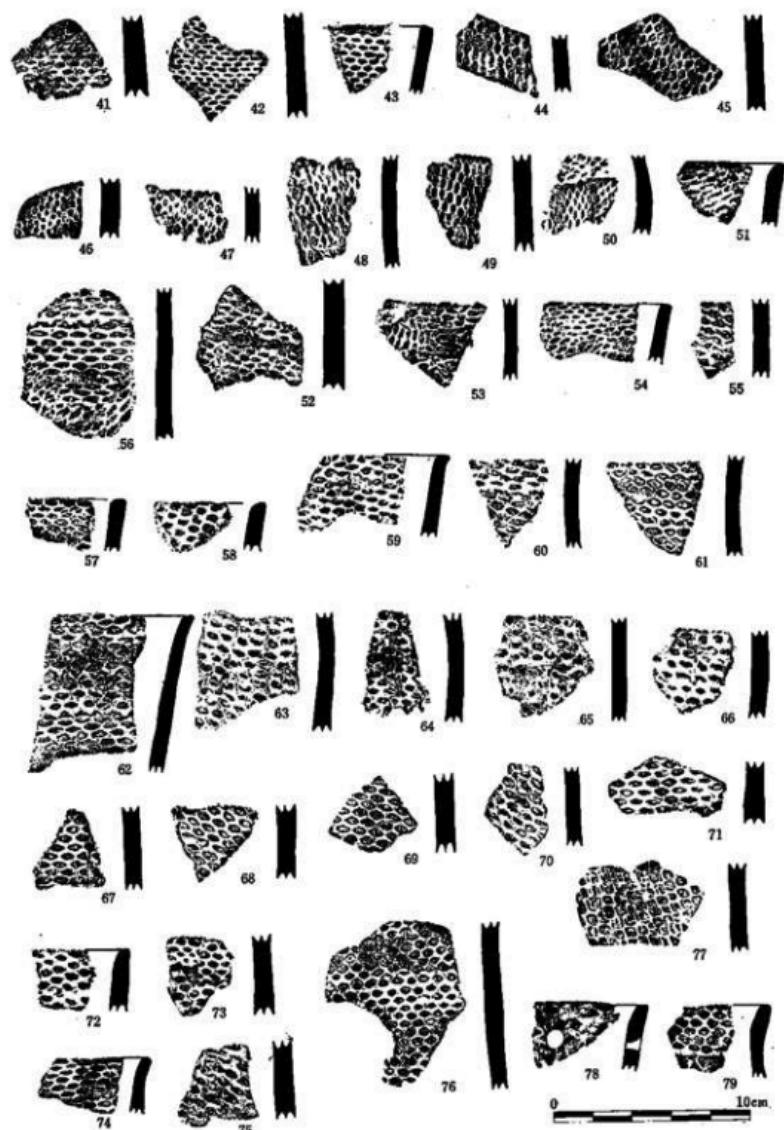
（89～91）は穀粒状の楕円を山形文状に規則正しく配列してある。91は外反する口縁部破片で、口唇部に同施文法で、文様を加飾してある。色調はすべて茶褐色を呈し、雲母を微量含み、焼成は中位である。

#### D類 複合押型文（第14図（92～100）、図版8）

D類の中で、楕円文と他の文様の組み合わせをDの1種、山形文と楕円文の組み合わせをDの2種と決めておこう。

Dの1種は（92～94）までを示している。

92は綾杉形文と楕円文が交互に帯状に施文されており、楕円文は幾分粗大化の傾向をたどっている。色調は黒褐色を呈し、雲母を含み、内面は研磨されている。



第13図 第2群土器拓影

94は椭円文の下にヘラ先による沈線を逆三角形状に施し、全体的には幾何学的な文様を構成している。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

Dの2種(95~100)までを示している。

95は丸型に近い椭円と山形文を縦位に配し、すかに外反し、内そぎの口縁部破片である。口唇は僅かであるが丸味を呈している。黒褐色を呈し、焼成は不良である。

(96~97)は山形文が鋭角で、施文帯の狭いもの、色調は黄褐色(96)、赤褐色(97)を呈し、雲母を含み、焼成は良好である。

(98~100)は山形文が鋭角で、施文帯の広いもの、色調は茶褐色(98)、黒褐色(99~100)を呈し、長石、雲母をわずかに含み、焼成は不良である。

#### E類 穢形細線押型文(第14図(101~102)、図版8)

施文具に稜形細線の凹凸をつけ、それを回転することにより、幾何学的な文様がつけられている。

(101)は小さな椭円と稜形細線のくりかえしで、文様構成がなされている。

色調は黄褐色(101)、赤褐色(102)を呈し、雲母を含み、焼成は中位である。

(101)の内面にはかなりの炭化物が付着している。

#### F類 線状押型文(第14図(103~105)、図版8)

103は縦縞状に、(104~105)は横縞状に、それぞれ押捺されている。色調は茶褐色(103)、黒褐色(104~105)を呈し、すべて胎土中に雲母や多量の磁鐵を含み、焼成は中位である。

#### 第3群土器(第14図(106~109)、図版8)

いわゆる燃糸文上器を一括して第3群土器とした。いずれも破片で器形を判別することはできないが、第2群上器にくらべて、出土数の微量なことは注目すべき点であろう。

(106, 109)は比較的太い燃糸を、(107~108)は比較的細い燃糸を、それぞれ使用している。

108は燃糸文の間に細い沈線を施し、燃糸文を幾分磨消した痕跡を察知することができる。

磁鐵を含み、焼成は中位で、色調は黒褐色(106)、赤褐色(107)、茶褐色(108~109)を呈している。

#### 第4群土器(第14~15図(110~117)、図版8)

いわゆる貝殻沈線文土器を一括して第4群土器とした。この一群は綱年学上田戸下層式の範疇に含まれている。

器形は平縁(117)、及び波状口縁(114)のやや綫長の砲弾型深鉢尖底土器と思われる。

口縁部断面は外そぎ(114)、内そぎ(117)のものがある。文様はヘラ及び半剖竹管による沈線文が主流で、浅く太く施した沈線(112)、燃糸文と沈線の合わさったもの(117)等がみられる。

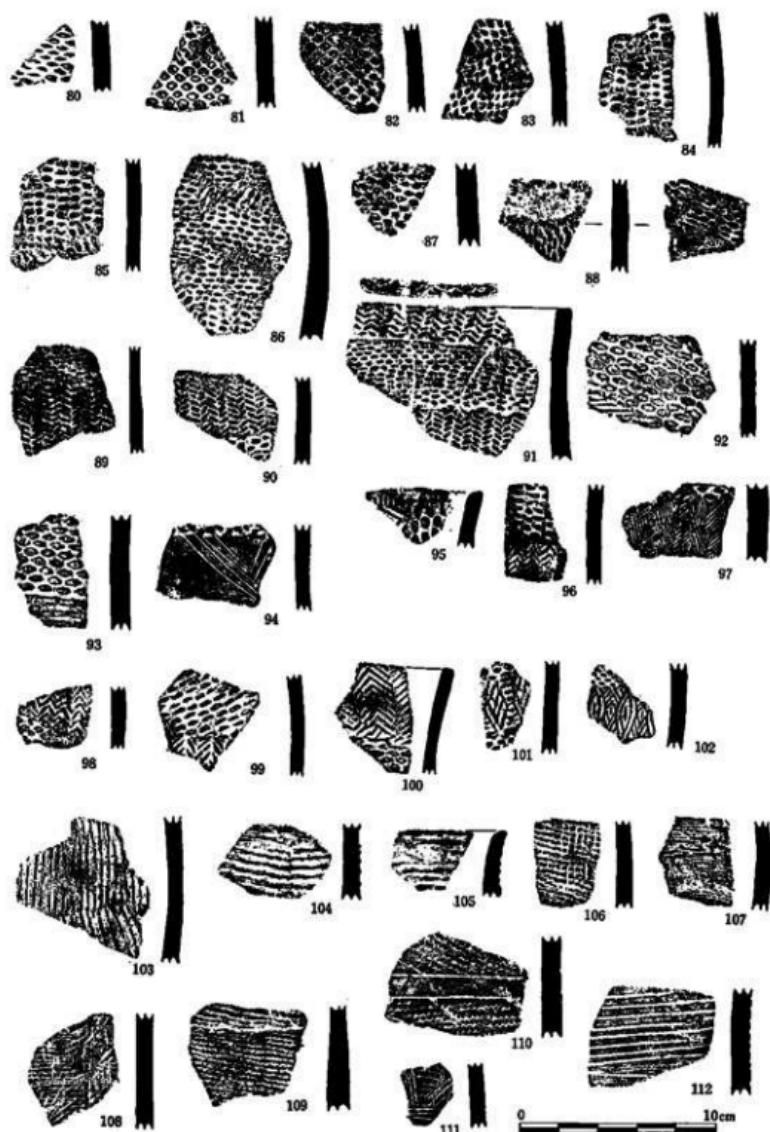
また沈線を細く深く施し、さらにアナダラ属貝殻の腹縁を押し付け、鋸齒文を構成しているもの(110~111)、(115~116)。

沈線が太く、鋸齒文を配してあるもの(113)。

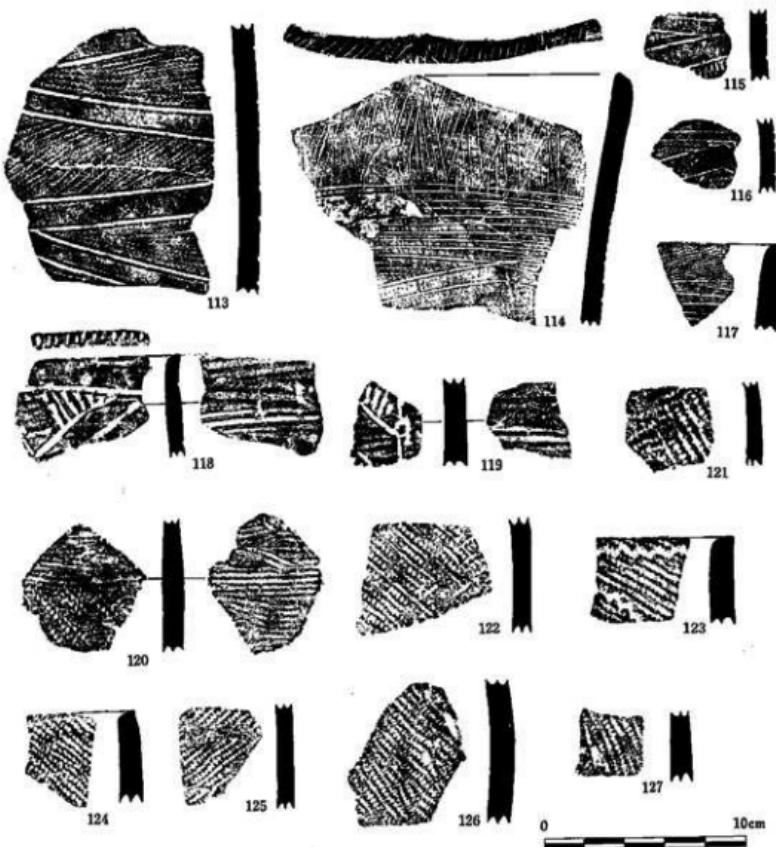
114は口縁上部に細く、深い沈線を格子状に、さらに口肩部にも沈線を加えてある。

胎土は雲母を含み、焼成は良好、ヘラによる調整がゆきとどいている。

厚さは7~10mm程度が多く、厚手に属する。色調は茶褐色(110, 114, 117)、黒褐色(111,



第14図 第2~4群土器拓影



第15図 第4~6群土器拓影

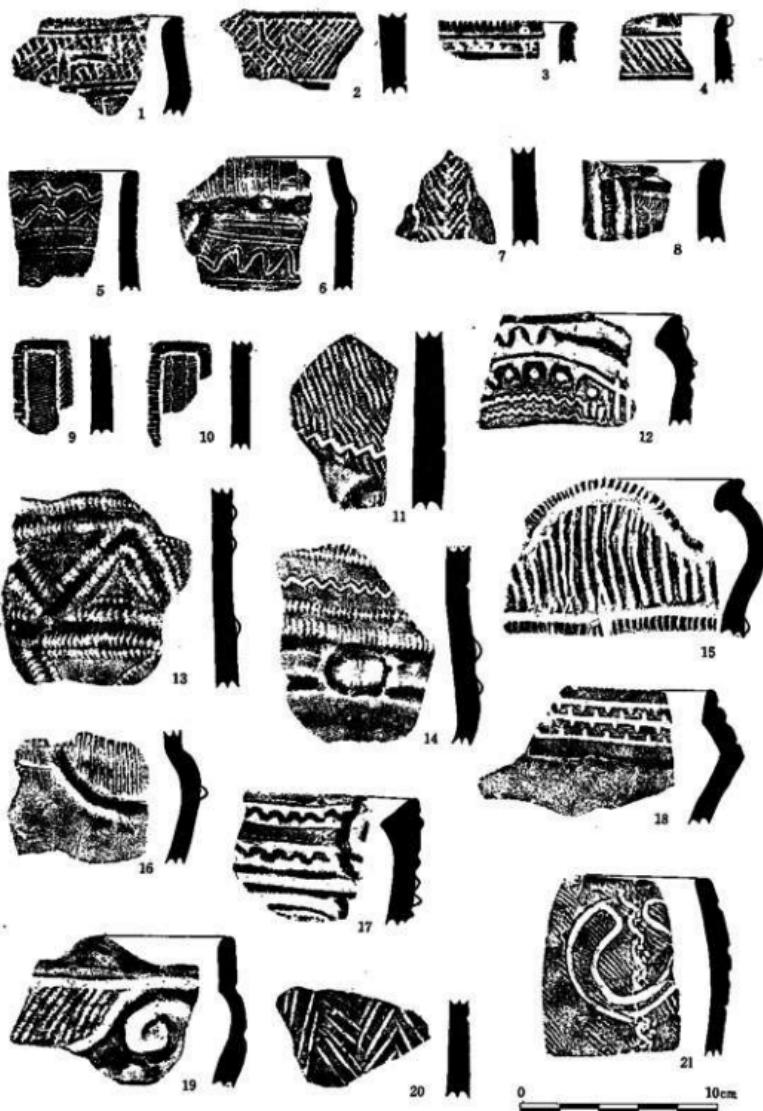
113, 115), 赤褐色 (112, 116) とさまざまである。

#### 第5群土器 (第15図 (118~120), 図版9)

いわゆる貝殻条痕文土器を一括して、第5群土器とした。今回の発掘で出土したのは、ここに載せた3片のみで、すべて胎土中に多量の繊維を含んでいる。

(118~119)はヘラによる沈線文や刺突文の組み合せにより幾何学的な文様を構成し、さらに内面にはアナダラ属の貝殻による横位の条痕文を施してある。118は口唇部に刻目を有している。色調は茶褐色 (118~119) を呈し、焼成は良好である。(118~119)は鞆ヶ島台式に類似するであろう。

120は破片上部に横位の貝殻条痕文を、下部には単節斜縞文を、内面には条痕文を、それぞれ施



第16図 第7群土器拓影

してある。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。関東地方の茅山下層式に位置づけできよう。

#### 第6群土器（第15図（121～127）、図版9）

いわゆる繩文前期前葉の上器を一括して第6群土器とした。すべての破片に繩維を含んでいる。121は羽状繩文、122は異条斜繩文、（123～127）は単節斜繩文を配してある。（123～124）は内そぎの口縁部破片であり、124は破片上部と下部に4本一束の櫛状工具による刺突文がなされている。

色調は黒褐色（123）、茶褐色（121～122、124～127）を呈し、焼成は中位である。

#### 第7群土器（第16図（1～21）、図版9）

いわゆる繩文中期の上器を一括して第7群土器とした。

（1～4）は隆線で方形に区画された中に、半截竹管による平行沈線を籠目状に配してある。

（1～2）は平行沈線文の中に、さらに不則規な沈線を施し、文様効果を増している。

（3～4）は隆線の上に、連続爪形文を整然とつけてある。

色調は茶褐色（1）、黒褐色（2～4）を呈し、全般的に雲母をわずかに含み、焼成は中位である。

（5～6）は無文地に半截竹管による沈線を平行・波状に配してある。

6は隆帯を加え、その上に指頭圧痕文を押捺してある。色調は黒褐色（5）、茶褐色（6）を呈し、雲母・長石粒を含み、焼成は中位である。

（1～6）は関東の五領ヶ台式、長野県の梨久保式に併行するものである。

（7）はS字状結節繩文の発達が著しいもの。

黄褐色を呈し、胎上中に石英を含み、焼成は中位である。7は関東地方の下小野式に類似するであろう。

（8～10）は隆帯や沈線で区画され、その中に平行沈線を斜走させたり、連続爪形文を施してあり、いわば区画文の発達が著しい時期のものである。

色調は赤褐色（8）、黄褐色（9～10）を呈し、胎上中に多量の雲母を含み、焼成は良好である。

（8～10）は藤内期のものであろう。

（11～14）は竹べらによる連続爪形文や隆起帯が配され、抽象文を表現している。

（11）は破片上部には単節斜繩文を、その下に低い隆起帯を加飾してある。

（12）は内そぎの口縁を呈し、円形竹管文を配してある。

（13）は隆線を波状に貼り付け、その縁に連続爪形文を施してある。

（14）は隆線を横位に2本貼り付け、その中に、それを楕円形状に貼りつけてあり、幾分屈折底の様相を呈している。

色調は黄褐色（11）、赤褐色（12）、茶褐色（13～14）を呈し、雲母・長石・石英を含み、焼成は中位である。（11～14）は藤内期の代表的な土器片であろう。

15は内反する口縁部破片で、上部には隆帯を弧状に、下部には、それを横位に貼り付け、それらの上に鋭い連続爪形文を配し、さらに2つの隆帯間に深い沈線が斜走している。色調は黒褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好である。

16は隆線を弧状に貼り付け、その中に沈線文を配し、いわば櫛形文様を構成している。

赤褐色を呈し、雲母を含み、焼成は中位である。煮沸具に使用したらしく、内面に炭化物が相当

量付着している。

16は井戸尻の新式に類似するのであろう。

17は蛇行状や直線状の隕帶を数条横位に貼り付け、茶褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好である。

18は浅鉢型を呈する口縁部破片で、上部と下部に細かな繩文を配し、その中に半円な沈線をじぐさく状に付けてある。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好。

19は尖起状の口縁で、隆起渦巻文を主文様とし、それに区画された中に斜繩文がみられるもの。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

20はヘラ状工具による沈線を矢羽根状に施してあるもの。色調は茶褐色を呈し、焼成は中位である。

21は斜繩文地にヘラによる沈線を馬蹄形状に配してある。色調は黒褐色で、チカチカするほど雲母を多量に含み、焼成は中位である。(17~21)は加曾利E式であろう。

最後に、その他の土器片、陶器片としては、繩文後期、上師器、須恵器、灰陶陶器、中世の内耳が數点出土している。

(小池政美)

## 第2節 第1号焼石群・第3号焼石群出土土器

### 第1号焼石群と第3号焼石群の遺物照合図の見方

第1号焼石群と第3号焼石群は遺物の出土分布と層位に主眼をおいた。

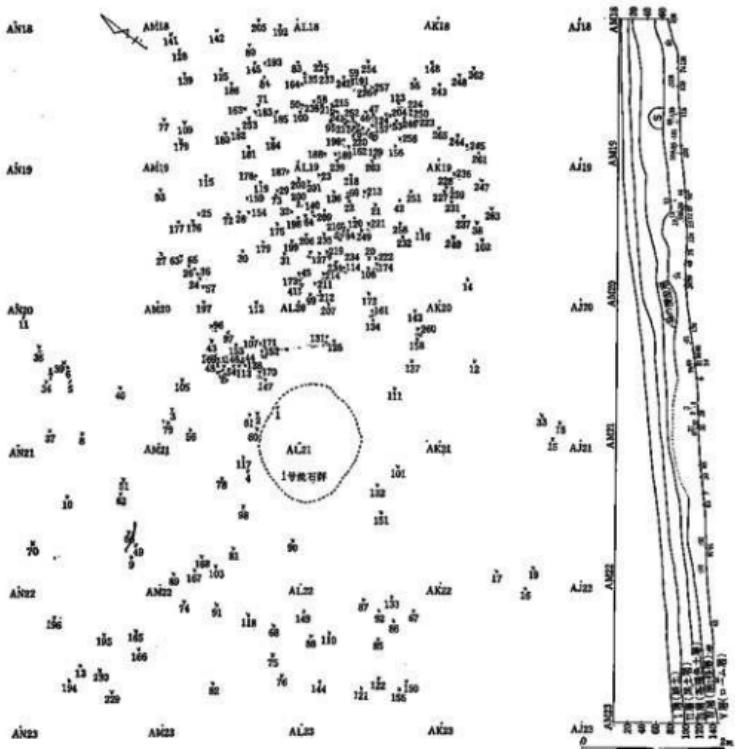
そこで、第18図と第23図の遺物照合図について説明しよう。

図番号は土器折影の通し番号、図版は上器の写真、土器は第1号焼石群(第17図)、第3号焼石群(第24図)の遺物分布断面図の上器通し番号をそれぞれ意味している。遺物分布断面図の断面図は図番号と同じである。色調は茶…茶褐色、黒…黒褐色、赤…赤褐色、黄…黄褐色。

胎土は、セ…纖維、雲…雲母、長…長石。

焼成は、良…良好、中…中位、不…不良をそれぞれ意味している。

(小池政美)



第17図 第1号焼石群遺物分布断面図

第18図 第1号焼石群遺物照合図

図番号	図版	土器	色調	胎土	焼成	図番号	図版	土器	色調	胎土	焼成
第19図 1	10	1	黒	長	良	第19図 10	10	17	茶	七	良
# 2	#	2	茶	雲	良	# 11	#	18	茶	長	良
# 3	#	3	茶	雲	良	# 12	#	18	茶	雲	良
# 4	#	8	黒	七	良	# 13	#	22	茶	長	良
# 5	#	4	茶	七	良	# 14	#	24	茶	雲	良
# 6	#	5	茶	七	良	# 15	#	25	茶	長	良
# 7	#	10	茶	七	良	# 16	#	25	茶	雲	良
# 8	#	13	茶	雲	良	# 17	#	28	茶	七	良
# 9	#	15	茶	長	良	# 18	#	27	茶	長	良

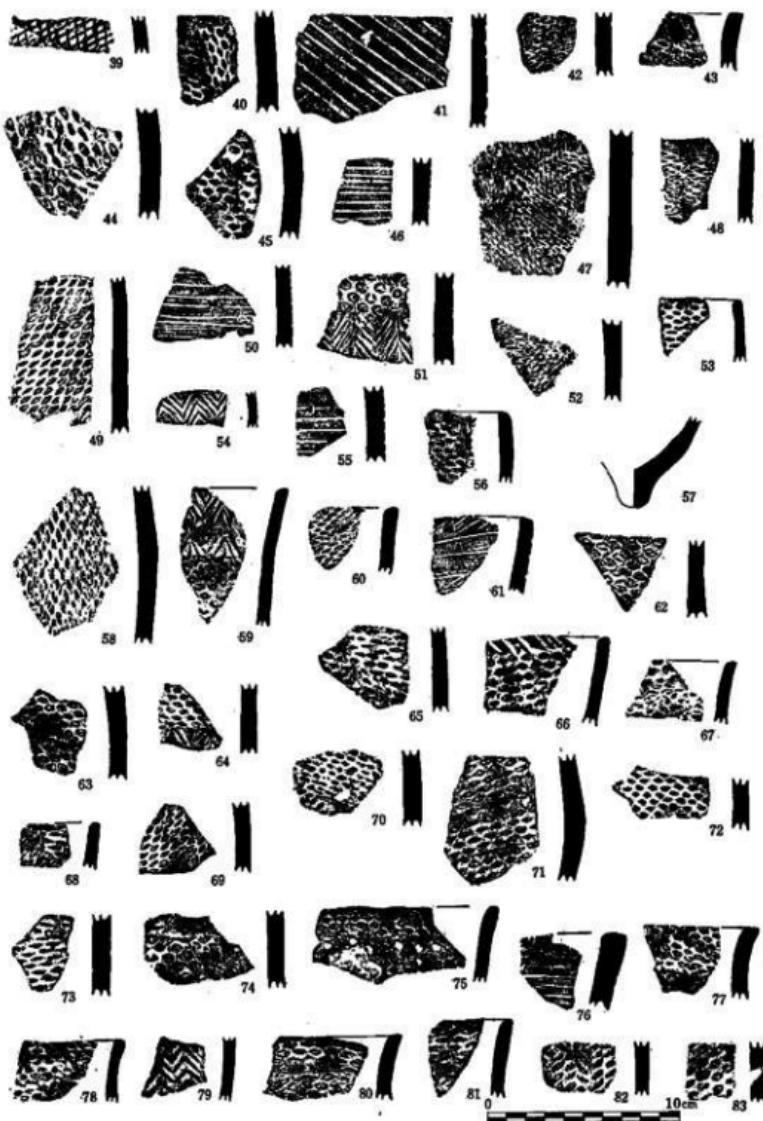
図番号	図版	土器	色調	胎土	焼成	図番号	図版	土器	色調	胎土	焼成
第19図19	10	31	茶	七	良	第20図60	11	93	黒	雲	中
" 20	"	32	黒	長	良	"	61	"	91	黒	雲
" 21	"	35	黒	七	良	"	62	"	97	茶	長
" 22	"	36	黒	七	良	"	63	"	98	黄	雲
" 23	"	38	黒	雲	良	"	64	"	100	茶	雲
" 24	"	40	茶	七	良	"	65	"	101	黒	長
" 25	"	43	茶	雲	良	"	66	"	102	黒	雲
" 26	"	44	茶	雲	良	"	67	"	107	黒	長
" 27	"	37	茶	雲	良	"	68	"	109	茶	雲
" 28	"	46	茶	長	良	"	69	"	113	茶	雲
" 29	"	47	茶	雲	良	"	70	"	114	赤	雲
" 30	"	48	茶	長	良	"	71	"	117	茶	雲
" 31	"	48	黒	長	良	"	72	"	120	黒	雲
" 32	"	49	黄	長	不	"	73	"	120	茶	雲
" 33	"	51	黒	七	良	"	74	"	125	黒	雲
" 34	"	55	黒	長	良	"	75	"	127	黒	雲
" 35	"	56	茶	雲	良	"	76	"	133	黒	長
" 36	"	57	茶	雲	良	"	77	"	136	黒	雲
" 37	"	60	茶	雲	良	"	78	"	138	黒	雲
" 38	"	64	茶	雲	良	"	79	"	139	茶	長
第20図39	"	61	黒	雲	不	"	80	"	143	黒	長
" 40	"	65	茶	長	中	"	81	"	144	茶	長
" 41	"	67	黒	雲	良	"	82	"	144	茶	長
" 42	"	68	茶	雲	良	"	83	"	148	黒	雲
" 43	"	69	黒	長	良	第21図84	"	149	黒	雲	良
" 44	"	69	茶	長	中	"	85	"	150	黄	長
" 45	"	72	茶	雲	中	"	86	"	152	黒	長
" 46	"	73	茶	長	良	"	87	"	154	茶	七
" 47	"	74	黄	七	中	"	88	"	157	黒	長
" 48	"	75	黒	雲	良	"	89	"	155	茶	七
" 49	"	79	茶	雲	中	"	90	"	159	黒	長
" 50	"	80	赤	長	良	"	91	"	158	茶	雲
" 51	"	81	黒	雲	中	"	92	"	160	黒	雲
" 52	"	82	黄	七	中	"	93	"	161	黒	長
" 53	"	83	黒	雲	良	"	94	"	169	茶	長
" 54	"	85	茶	雲	中	"	95	"	162	茶	雲
" 55	"	87	黒	長	良	"	96	"	172	黒	雲
" 56	"	88	黒	雲	中	"	97	"	168	茶	七
" 57	"	89	黒	雲	中	"	98	"	171	茶	長
" 58	"	86	黄	雲	良	"	99	"	173	黒	雲
" 59	"	92	茶	雲	良	"	100	"	176	黒	雲

図番号	図版	土器	色調	胎土	焼成	図番号	図版	土器	色調	胎土	焼成
第21図101	11	179	黒	長	中	第21図122	11	233	茶	雲	良
" 102	"	181	茶	長	中	" 123	"	227	黒	雲	良
" 103	"	188	赤	雲	良	第22図124	"	232	茶	長	中
" 104	"	189	黒	長	良	" 125	"	235	黒	長	良
" 105	"	196	黄	七	不	" 126	"	236	茶	長	良
" 106	"	197	黒	長	良	" 127	"	240	茶	雲	中
" 107	"	200	茶	長	良	" 128	"	243	茶	長	中
" 108	"	205	黒	雲	良	" 129	"	241	黒	雲	良
" 109	"	208	黒	七	不	" 130	"	242	茶	七	不
" 110	"	210	黒	雲	良	" 131	"	244	茶	雲	中
" 111	"	211	茶	七	中	" 132	"	245	黒	雲	良
" 112	"	223	黒	長	良	" 133	"	247	黒	長	中
" 113	"	212	茶	長	良	" 134	"	248	黒	雲	中
" 114	"	225	黒	雲	中	" 135	"	252	黄	長	中
" 115	"	204	黄	長	中	" 136	"	254	黒	雲	良
" 116	"	212	黄	長	不	" 137	"	255	茶	雲	良
" 117	"	213	黄	雲	良	" 138	12	260	黒	雲	良
" 118	"	226	黒	雲	中	" 139	11	257	黒	雲	中
" 119	"	229	黒	雲	良	" 140	"	262	黄	長	良
" 120	"	228	茶	七	不	" 141	"	焼下	黒	雲	良
" 121	"	231	黒	長	不						

第18図 第1号焼石群遺物圖合図



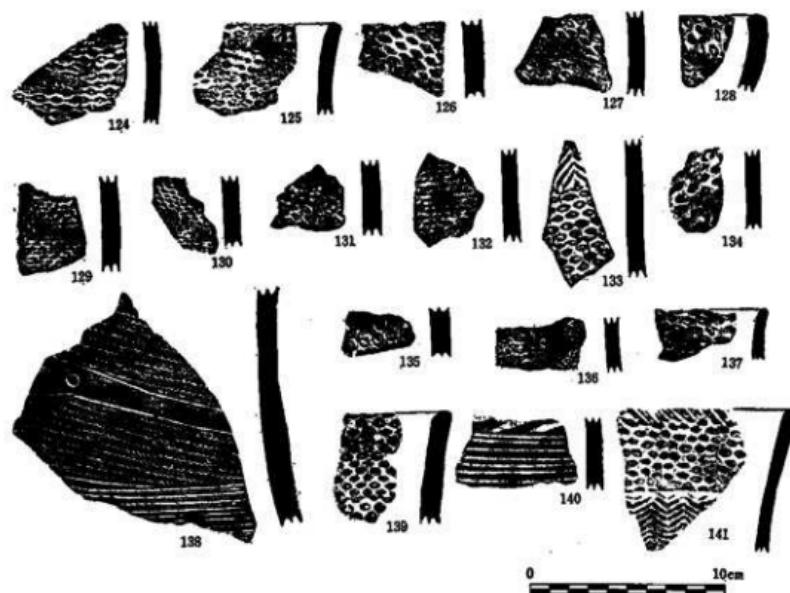
第19圖 第1号 烧石群土器拓影



第20図 第1号 烧石群土器拓影



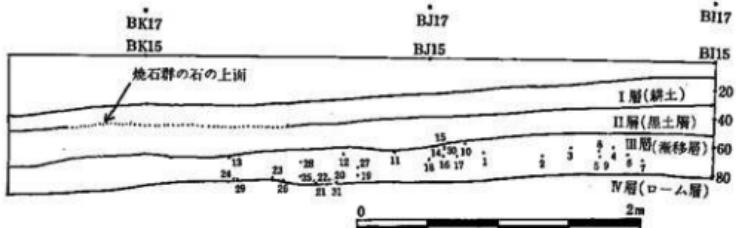
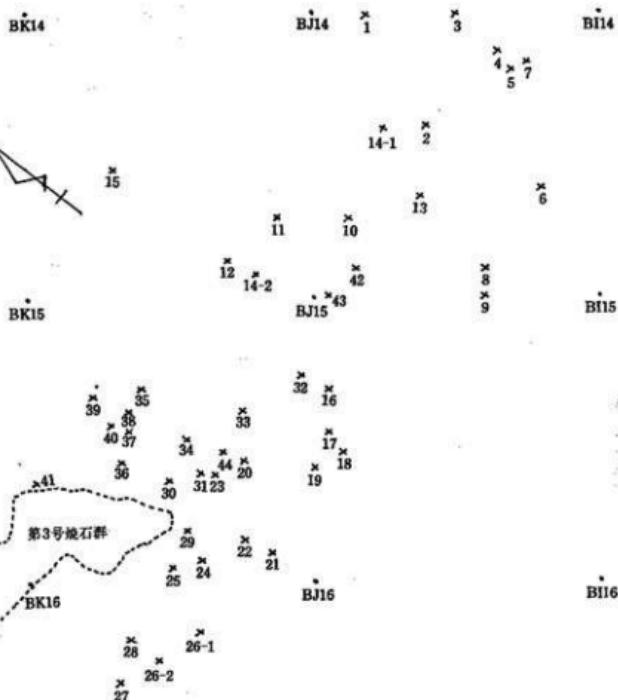
第21図 第1号焼石群土器拓影



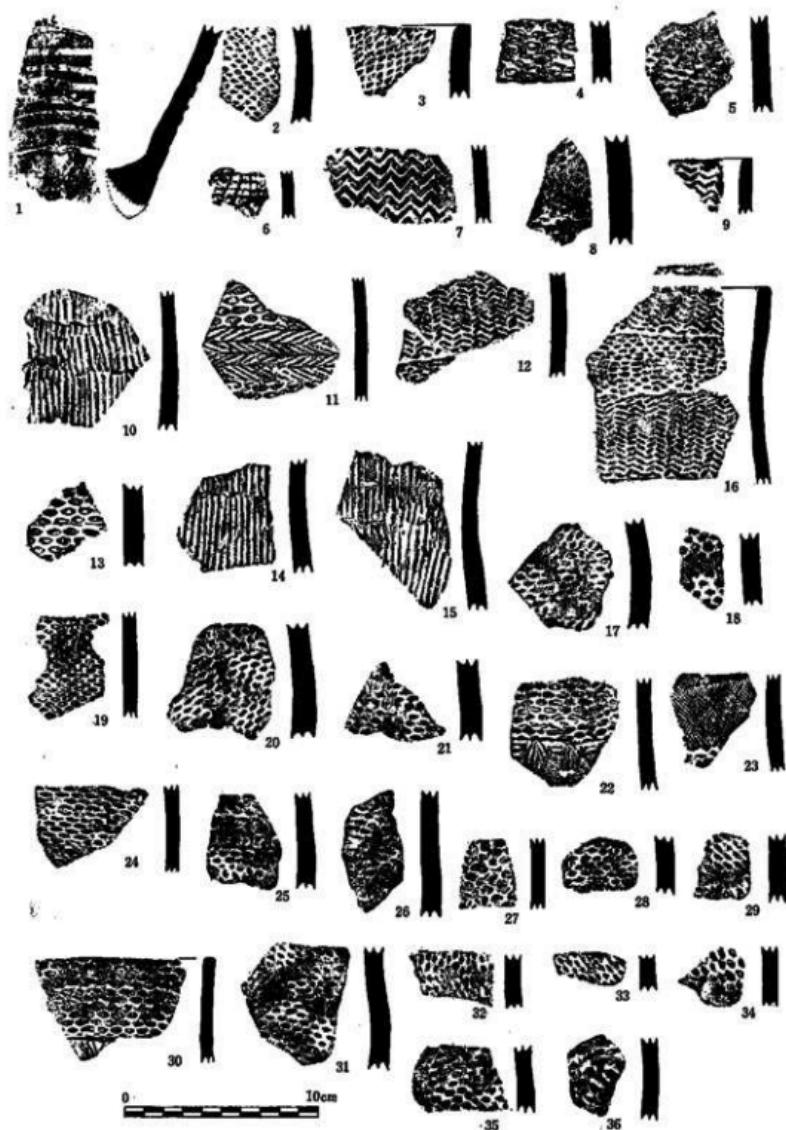
第22図 第1号焼石群土器拓影

国番号	図版	土器	色調	胎土	焼成	国番号	図版	土器	色調	胎土	焼成
第25図1	12	1	茶	長	良	第25図19	12	22	黒	雲	良
" 2	"	2	茶	雲	良	" 20	"	23	茶	雲	良
" 3	"	3	黒	雲	良	" 21	"	24	茶	雲	良
" 4	"	4	茶	雲	良	" 22	"	26-1	赤	雲	良
" 5	"	9	黒	雲	良	" 23	"	26-2	茶	雲	良
" 6	"	5	茶	長	不	" 24	"	27	黒	長	良
" 7	"	7	茶	雲	中	" 25	"	29	茶	雲	良
" 8	"	8	茶	雲	良	" 26	"	30	茶	雲	良
" 9	"	9	茶	雲	良	" 27	"	33	茶	雲	良
" 10	"	10	黒	雲, 七	良	" 28	"	34	茶	雲	良
" 11	"	11	黒	雲	良	" 29	"	36	黒	雲	良
" 12	"	12	茶	長	良	" 30	"	43	黒	長	中
" 13	"	15	茶	雲	良	" 31	"	44	茶	雲	良
" 14	"	17	黒	雲, 七	良	" 32	"	燒No.1	茶	雲	良
" 15	"	17	黒	雲, 七	良	" 33	"	燒No.1	茶	雲	良
" 16	"	16	黒	長	良	" 34	"	燒No.4	黒	長	良
" 17	"	18	茶	雲	良	" 35	"	燒No.2	黒	長	良
" 18	"	19	茶	雲	良	" 36	"	燒No.3	黒	長	中

第23図 第3号焼石群遺物照合図



第24圖 第3号塊石群遺物分布断面圖



第25図 第3号焼石群土器拓影

### 第3節 石 器

今回の発掘で、押型文土器あるいはそれに近い時期に付随できそうな石器は、第26図(1~9)、縄文中期に伴なうのは第27図(1~13)である。

#### 磨 石 (第26図(1~2), 図版13)

硬砂岩を用い、1は完全に半分は欠損しているために、断面は半月形を呈している。

2は部分的に、こまかな蔽打の痕跡が認められる。

#### 砾 器 (第26図(3), 図版13)

頭部は打撃を加えて打ち欠き、下部はわずかに磨いてある。石質は硬砂岩を使用してある。

#### 棒状石器 (第26図(4), 図版13)

硬砂岩を棒状に加工し、わずかに磨いた石器である。形態からして、押型文土器に混って出土するこくずり石に類似しているように思われる。

#### 搔 器 (第26図(5~7), 図版13)

剥片の縁に刃を付けた石器を総称して搔器という。刃の付けかたからして、部分的に付けたもの(5~6)、ほぼ周縁に付けたもの(7)の二種類に分けられる。石質はチャート製である。

#### 石 匙 (第26図(8), 図版13)

黒耀石製で、横型の石匙である。調整はゆきとどいており、わずかに自然面が認められる。

#### 石 鑿 (第26図(9), 図版13)

黒耀石製で、底辺の抉入部分が深くなり、脚の長さは均等ではない。

#### 打製石斧 (第27図(1~6), 図版13)

比較的雑な河原石の周辺をわずかに打ち欠いて、加工調整された石斧であり、形態からして撥形、短冊形、分銅形の三種類に分けられる。(1~5)は下端部がひらく撥形であり、石質は閃綠岩(1, 3)、硬砂岩(2, 4~5)を使用している。(1, 3, 5)は扁平で、薄く製作されているのが特徴である。

6は長方形状を呈する短冊形に分類される石斧で、右側辺は剥離が丁寧になされている。

#### 磨製石斧 (第27図(7~8, 13), 図版13)

磨製石斧は打製石斧と用途上で大きな差異が認められ、形態からして定角式と乳棒状式に分けられる。

(7~8)は定角式石斧であり、刃部は非常に鋭利で、調整がゆきとどいている。下部は欠損しており、蛇紋岩質である。

蛇紋岩は遺跡の複合段丘を形成する時に、大きな役割をはたした三峰川に多く産する。13は乳棒状石斧であり、前の2つと同様に、下部は欠損し、蛇紋岩を用いてある。

#### 大型打製石匙 (第27図(9, 12), 図版13)

縄文中期に多く出土し、この時期の特徴的な石器の一つである。本会の発掘では2点出土したのみである。

9は縦型で、比較的大幅広の剥片を使用し、周辺は粗雑な調整をしている。

12は横型で、刃部は細かな調整を形成しており、石質は双方とも硬砂岩を利用している。

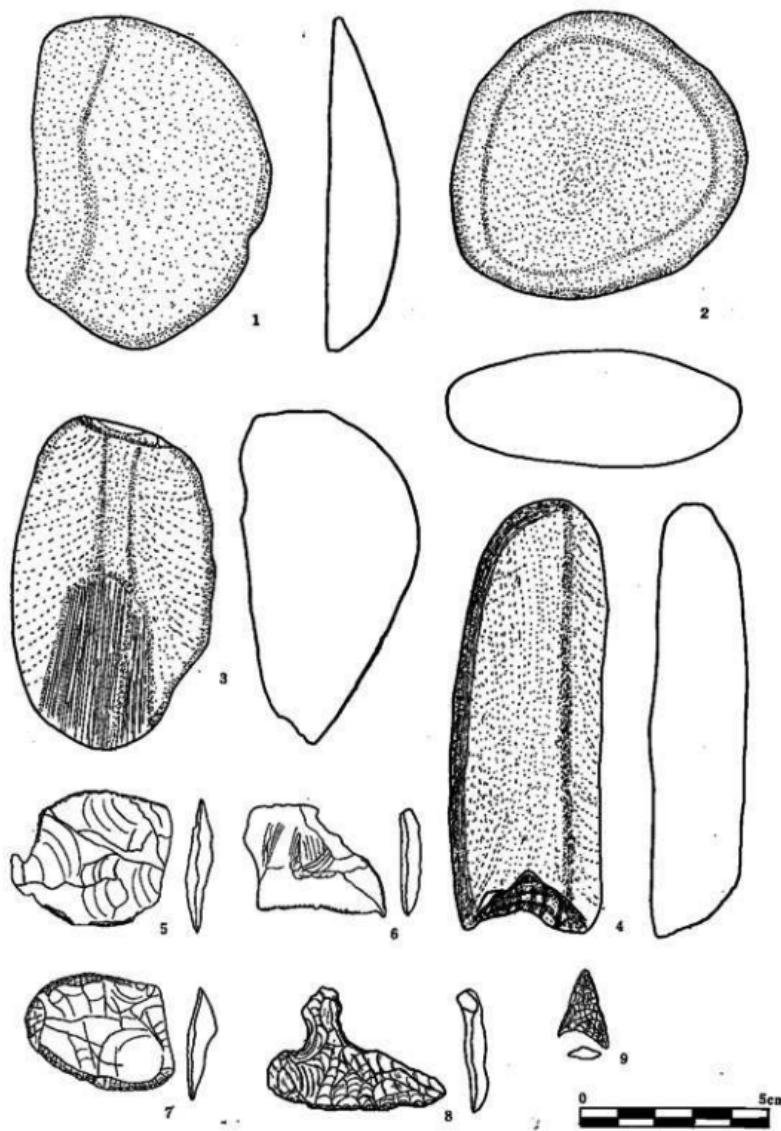
**砥 石（第 27 図 (10), 図版 13）**

研磨に用いられた石器である。砥石の中でも、いわゆる手持砥に含まれ、断面四角形を呈し、頭部は欠損しているために、はっきりした形態は不明である。石質は茶色を呈する油性の石である。

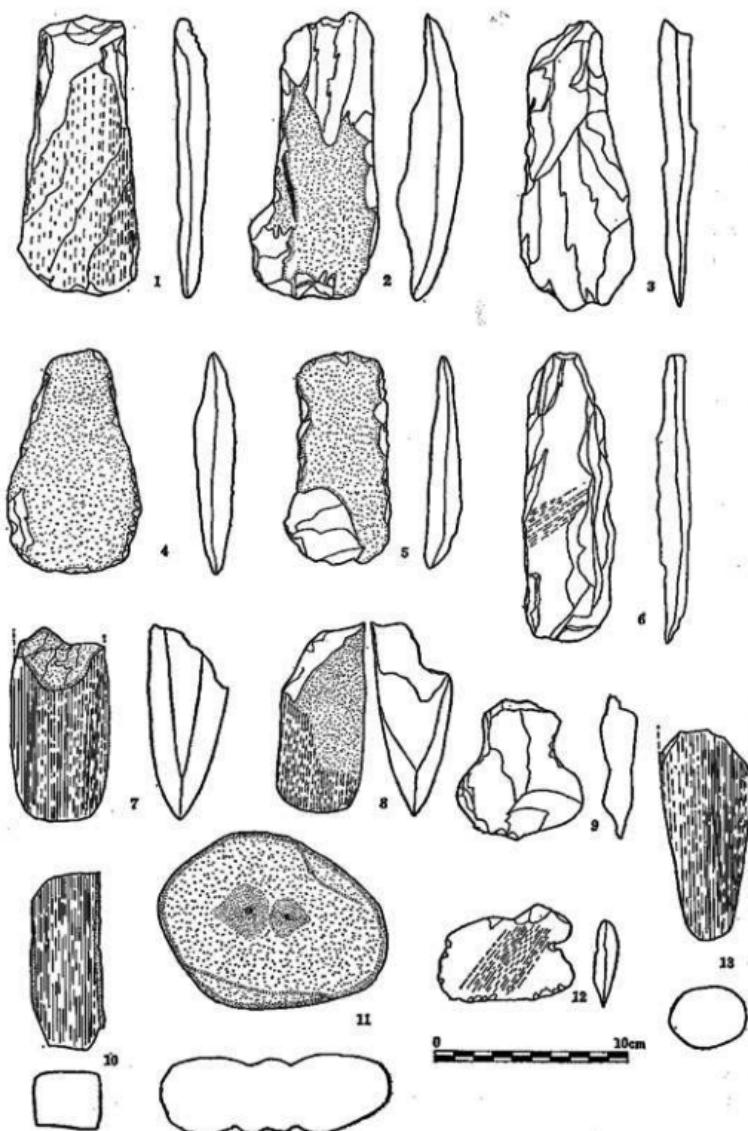
**凹 石（第 27 図 (11), 図版 13）**

扁平な硬砂岩を両面や側刃を研磨し、ほぼ橢円形状に作り、表面中央部には浅い 2 つの凹を、裏面には 3 つの凹をあけてある。

(柴 登己夫)



第26圖 石器実測図



第27圖 石 器 實 測 圖

## 第V章 まとめ

浜弓場遺跡は、長野県伊那市手良区中坪山道田に所在する。繩文早期・前期・中期・古墳・平安・鎌倉時代に至る複合遺跡である。昭和46年3月、所有者、神林賛三・向山幸人両氏の文化財保護に対する好意により、宅地造成工事を1カ年間延期していただき、伊那市教育委員会、小林教育長・浦野課長・保坂課長補佐の努力により、国庫補助を得て昭和47年12月2日～同月9日まで、発掘調査を行なったところ、次のとき結果を得たので、聊のまとめをし責務を果したいと思う。本調査の行なわれる以前昭和46年3月分布調査が行なわれ、本遺跡が有する繩文早期押型文より、次時期に移行する遺物が認められたので、その有方についての究明を目的にして、調査を実施した。先に、雑誌《伊那路》185号に、本遺跡の分布調査として、御子柴泰正・小池政美の両氏が報告されている地点を中心として、面積380m<sup>2</sup>を調査した。特に分布図に表示された、北地点および南地点は、層位による調査を試みた。調査の方法としては、純然たる層位による調査と、この期における生活遺構を中心とした両面をとり上げて調査した。この生活遺構を取り上げた理由としては、この期の遺跡に開通して、堅穴内に炉をもたないことが知られている。関東地方夏島・大丸各遺跡では炉址のみ発見された。また、その外側に疊群が存在した。大丸では炉穴が認められたという。関東以西では愛知県岡崎市村上遺跡では炉穴が発見された。そのほか、大阪府中河内神宮寺遺跡・奈良県山辺郡大川遺跡（いづれも早期初頭遺跡）では、円疊を野外に積んだ炉址が発見された。また、滋賀県大津市石山貝塚（早期末）、石積炉址が調査され、岡田茂弘氏は、近畿地方においては、おそらく、早期を通じて野外の石積み炉を中心として生活が営まれているのであろうとされている。この問題について、「故後藤守一博士も、同じようなことをいわれている」。

県内での押型文土器出土の遺跡についてみると、織沢遺跡では、Aトレンチに集石遺構が20カ所、大小の石が集積し、疊には一部木炭が付着、木炭片とともに多量の土器が付近から検出された。疊に木炭が付着していることはわかったが、疊そのものが焼けていたかどうか不明である。駒ヶ根市中沢横山遺跡では、枕大の石10個が配置され、中央は炉址状になり、内部墨土中より押型文土器が10数片検出したという。諏訪市細久保・飯田市立野両遺跡では、炉址あるいはピットなどの生活遺構は存在しなかったらしい。伊那市三つ木遺跡では、径40～60cm、深さ15～20cm、疊または平石を組み合わせた鉢状のもの、内側に向かって30～35度の傾斜を有する一見、石を組んだ炉址のようにもみられるが、縁が斜角をもつことや、底面まで石を數きつめてあるなど、一般的の石組炉とは趣を異にしている。積石遺構の傍らには、焼けた硬砂岩の岩疊が40～60個積んであった。また、同様な積石の下に、石組遺構が存在する場合もあった。三つ木遺跡では、浜弓場跡跡発見の焼石群と考えられるものと、集石の下から前述のこととき石組炉のものとの2例であった。駒ヶ根市養命酒駒ヶ根工場内遺跡からは、焼石群の下部より、石組炉が発見され、土器も上部に認められ、南箕輪村神子柴遺跡でも、浅い穴の中に存在するものと、一般的な集石との2種類が認められた。そのうち、第4号集石は径1.5mの円形で中心部にまったく疊を見ない、押型文土器と茅山式土器片が伴った。また、5号には諸葛式土器があった。そうすると集石の存在は夏島～神子柴5号

まで行なわれていたようである。以上概観したところ、完全な炉の形と、集石の下に石組炉のあるもの、浜弓場遺跡のごとく、一般的な集石との三種類が存したと考えられる。そこで、集石が焼けている状態を確認したのは三つ木遺跡頃であって、それ以前の集石遺構については、木炭片が付着している程度しか報告されていないので、それは単なる集石として取扱ってきたと考えられる。三つ木遺跡の集石は特別見事なものであったので、三つ木遺跡発掘を担当された八幡一郎博士はこれに注目された。その折見学にこられた藤森栄一先生は、「繩文式土器」のなかで、「くぼみに疎を集め、その上でさかんに焚火したものであろう。これは、はっきり土器でものを煮た炉ではなくて、石の上でものを焼いた跡である」といわれている。また、「シンボジウム繩文時代の考古学」でも、50mぐらゐの地域のなかに、17個の焼石群が認められた。同書のなかで江坂輝亦教授も、静岡県修善寺町池の本遺跡を笠津さんが焼石炉を調査していると報告されている。三つ木遺跡の焼石炉、焼石群を詳細に窺うと、焼石群の石は全部焼けていないこと、黒色土の中に層位的に群集していく、その下部はあまり火にあたっていないのが大部分であった。もし仮に、その上で焚火したとしたら石全体が焼けるのが普通であるが、全部の石が焼けていない点に疑問を感じるのである。根津清志氏の実験によれば、岩質によって焼けたが戻る場合もあるとのこと、この点焼石炉と焼石群とを区別して取扱う必要があると考えられる。以上焼石炉・焼石群・集石について述べてきたのであるが、本遺跡では一応焼石群は押型文期における生活址の一つとしてとりあげることとした。

第1号・2・3号の焼石群と、今まで行なわれてきた一般的層位との2系列にして報告をまとめたものである。この方法の可否は諸賢の御教示を賜りたいと思います。

浜弓場遺跡第1号焼石群の焼石は、人頭大80~100個三段におかれ、層位は漸移層中、焼石はマウンド状にかたい層上に集石されていた。焼石数の率は10%強が焼け石、岩質は変成岩・花崗岩、遺物は焼石群内およびその周辺より押型文・田戸下層式片を265点検出

第2号焼石群は、疊の数は50個、大きさは拳大・人頭大、断面はローム層上、大きさは80×60cm橢円形、大きい石は外側に、炉址状に囲むように。石の下は櫛鉢状に落込み、床面はわずかに堅く叩いているごとく、覆土中には炭化物・焼土、焼けている石は外側のみである。遺物は焼石群中から発見できなかったが、周辺からは橢円文が多く発見された。

第3号焼石群、大きさは90×180cm、疊は50個、拳大・人頭大。断面では2段組、下部はローム層直上に達していた。焼石群のある箇所はやや堅い。岩石は変成岩・花崗岩・硬砂岩、遺物は焼石群の中からは橢円文5片が出土した。

### 土器の分類

I群 斜繩文 1片出土し、層位は明らかでない。

II群 A類。山形文、40片、縱横の組合せ鋭角・鈍角・幅広のものと中間のもの。

B類。10片、小形格子目文・大形のもの・井桁状、そのうち数の多いのは、平行四辺形のものが1/3を占めている。

C類。橢円文は560片、粒の大小別、横に規則のあるもの、配列の不規則、粗大橢円文、

角ばった梢円、織維の有無。

D類。複合押型文を2分して、1種は梢円文と波紋文・梢円文と沈線文の組み合せ、後者は、田戸下層式に伴うものと思われる。2種、山型文と梢円文の組み合せ、これは一般的なもの。

E類。稜形細線押型文、2片、小破片、梢円文と複合したもの、あまり出土例をみないものである。

F類。縞状押型文、6片、縦縞・横縞の2種あり、織維が2種とも混入、回転による施文、織維含入であるところより新しいものと思われる。

III群 貝殻沈線文、60片、器形は平縁と波状、底部は砲弾形、深鉢尖底と考えられる。文様は、竪と竹管が主で、浅く太い沈線と幅の広いものと組み合わせ、また、沈線が細く深く鋸齒文が入っているもの、厚手に属する土器、竪による調製、胎土は当方にはみかけない土質。田戸下層式土器。

IV群 貝殻条痕文土器。3片、1種は鶴ヶ島台系統のもの、2種は、茅山下層系、ともに内面に条痕が見受けられる。

V群 前期前葉土器、10片、すべて織維を混入している土器、羽状繩文・半節綱繩文土器。

VI群 繩文中期、初頭（五領ヶ台、下小野）、中葉（井戸尻）、後葉（加曾利E式）。その他、後期、須恵、灰釉、内耳。

石器 早期。磨石3個、棒状石器1個、スクレバー3個、石鎌1個。

中期。打製石斧・擦形・短冊形30個。磨製石斧・定角・乳棒状計29個。大形打製石斧、擦形・横形・磨石、凹石、硬砂岩、両面2個～3個。

予備調査においては、子母口式土器が発見されているが、今回の調査では発見されなかった。本遺跡発見の、山型文は、同型文のうちでも、古い方に属するものとは考えられないよう思われる。格子目文では、組合文は発見されなかった。梢円文では、粗大梢円文が比較的多いこと、織維の入っているものは、縞状押型文と同時期と考えられる。撚糸文に織維が入っているから、梢円文の織維と縞状との三者はほぼ同時期に入るものではなかろうか。梢円文と田戸下層式土器との出土比率は9:1で、梢円文は圧倒的に多い。田戸下層式土器は他から持込まれたものかもしれない。

#### 住居址

第1号住居址。土師式住居址で、「カマド」が東北の隅にあり、位置的に珍しい。「カマド」は石灰粘土のつくり須恵、灰釉を伴う。

第2号住居址。床面に焼石が散乱していたが、「カマド」に使用されていた石ではないか。東と南は桑耕作中破壊されたもの。床面からは、土師、須恵、灰釉が検出された。

第3号住居址。桑園のため搅乱がはなはだしく、炉址のみ残在していた。遺物は加曾利E式。

第4号住居址。5号住居址と重複した住居址である。出土土器は、勝坂式。

第5号住居址。本址は、第4号住居址と重複している住居址で、加曾利E式である。

第6号住居址。本址は耕作で搅乱され、炉址と柱穴の一部が認められたのみ、遺物は、加曾利E

式。

土塙。本土塙は、第2号住居址の北寄りに発見されたもので、土塙内より内耳片を発見した。

今回の調査で、住居址関係は、時間的な余裕がなく完掘できなかつたことは、まことに残念であった。本調査に当たつては、地元手良区の方々、特に、浜弓場の皆様はもとより、遠く上智大学教授八幡一郎先生・畠博満先生、伊那北高等学校教諭清水英樹理博、長野県文化課係長金井汲次先生・指導主事桐原健先生の諸先生方のご指導を紙上をもって厚くお礼申し上げる次第であります。

(友野良一)

- 注 1. 世界考古学大系 日本  
2. 日本考古学講座  
3. 戸沢充則「桶沢押型文遺跡」 石器時代第二号  
4. 林茂樹、横山遺跡の斜繩文土器と押型文土器 信濃四の三  
5. 「上伊那郡誌」1巻 上伊那教育会 歴史編  
6. 「羽場下・舟山遺跡」 駒ヶ根市教育委員会  
7. 「舟山遺跡緊急発掘調査報告書」 駒ヶ根市教育委員会  
8. 「信濃資料」 1巻 信濃資料刊行会  
9. 日本の考古学 II巻 河出書房新社  
10. 日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上） 八幡一郎著  
11. 豊野遺跡（押型文土器文化の生活遺構について） 伊那路 9~10 藤沢宗平  
12. 縄文式土器 中央公論美術出版 藤森栄一  
13. シンポジウム縄文時代の考古学 学生社  
14. 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 47年度  
日本道路公団名古屋支所 長野県教育委員会  
15. 立野式土器について 1972 神村透  
16. 神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚 杉原莊介 芹沢長介  
17. 岩下洞穴の発掘記録 麻生優



東より西を眺む



北より南を眺む  
図版1 遺跡全景



土器出土状况



土器出土状况



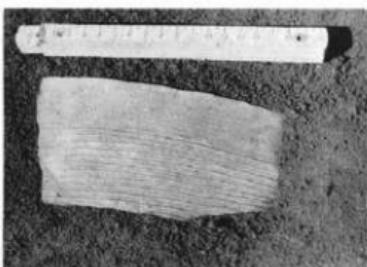
土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



第 1 号 烧 石 群



第 2 号 烧 石 群



第 3 号 烧 石 群  
图版 4 遗 槽 (烧 石 群)



第1号住居址



第1号住居址のカマド



第2号住居址と土塁

図版5 遺構(住居址、土塁)

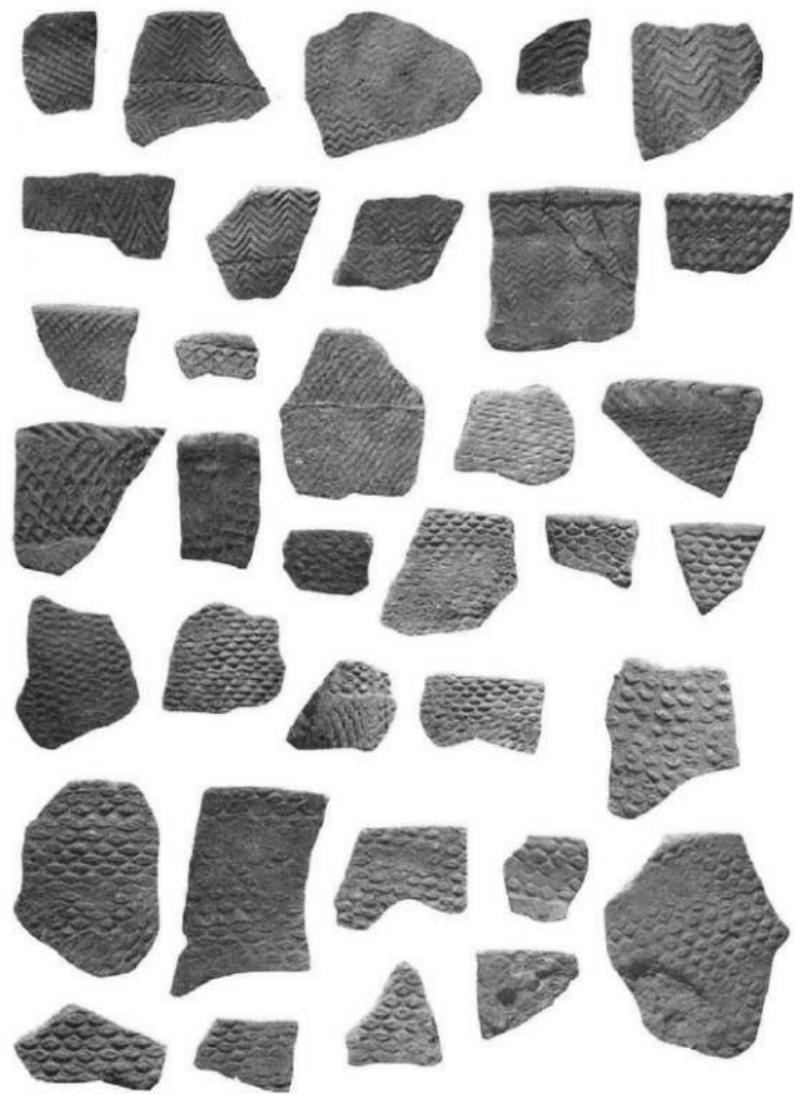


第4号、5号住居址

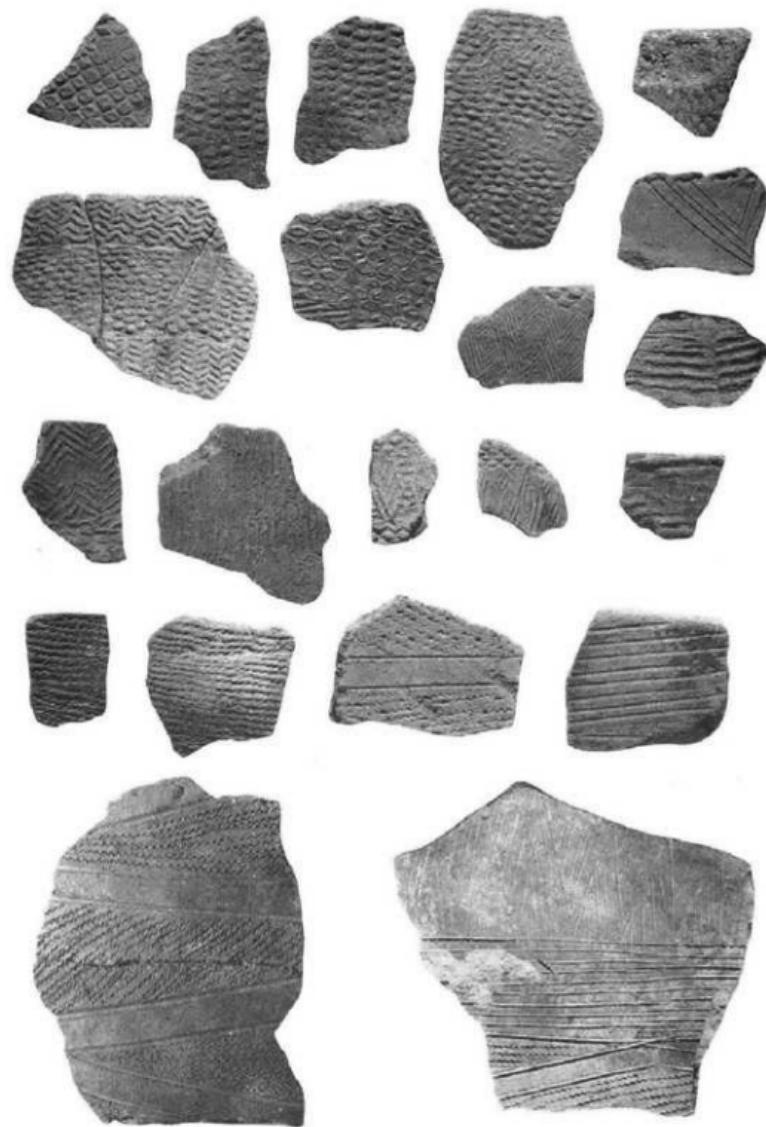


第6号住居址

図版6 遺構(住居址)



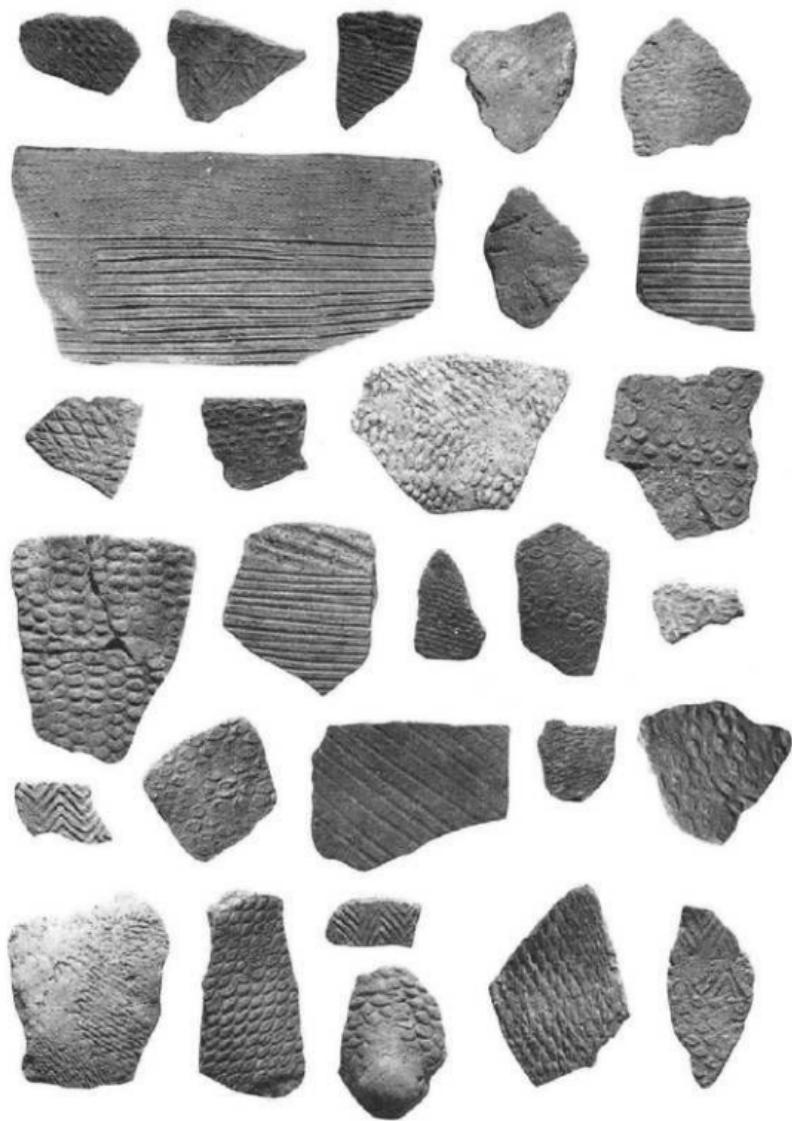
図版7 第 1 ~ 2 群 土 器



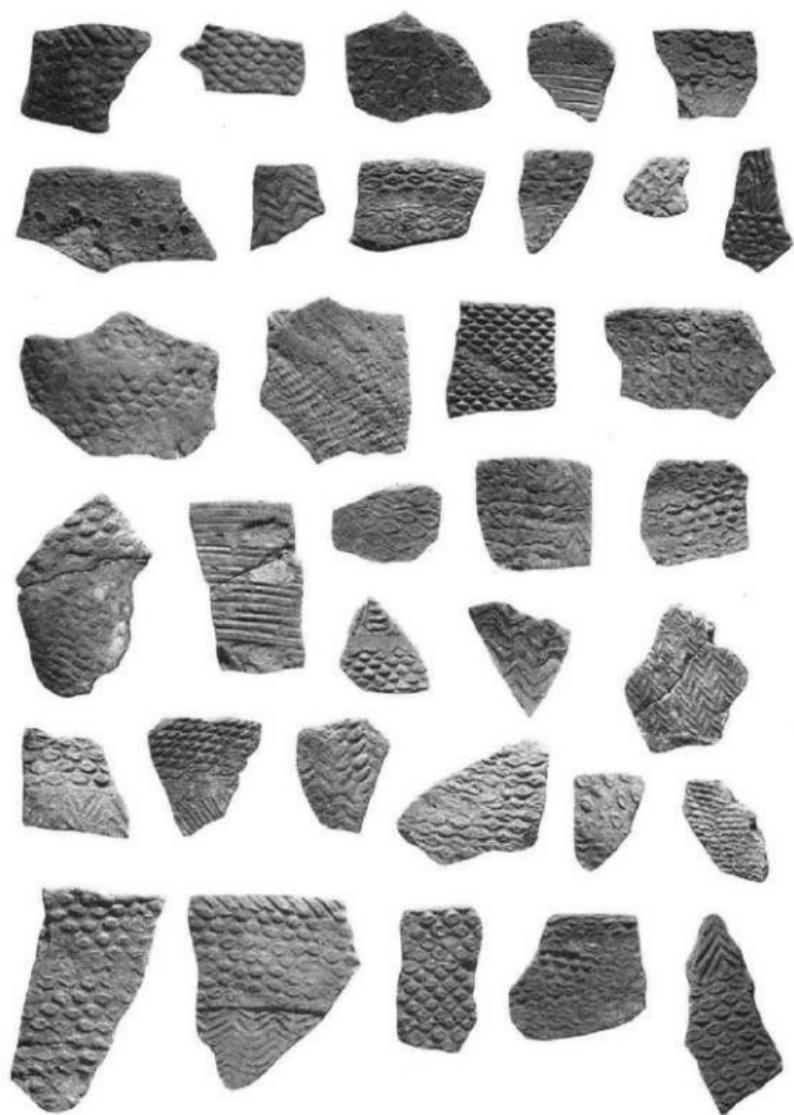
図版8 第 2 ~ 4 評 土 器



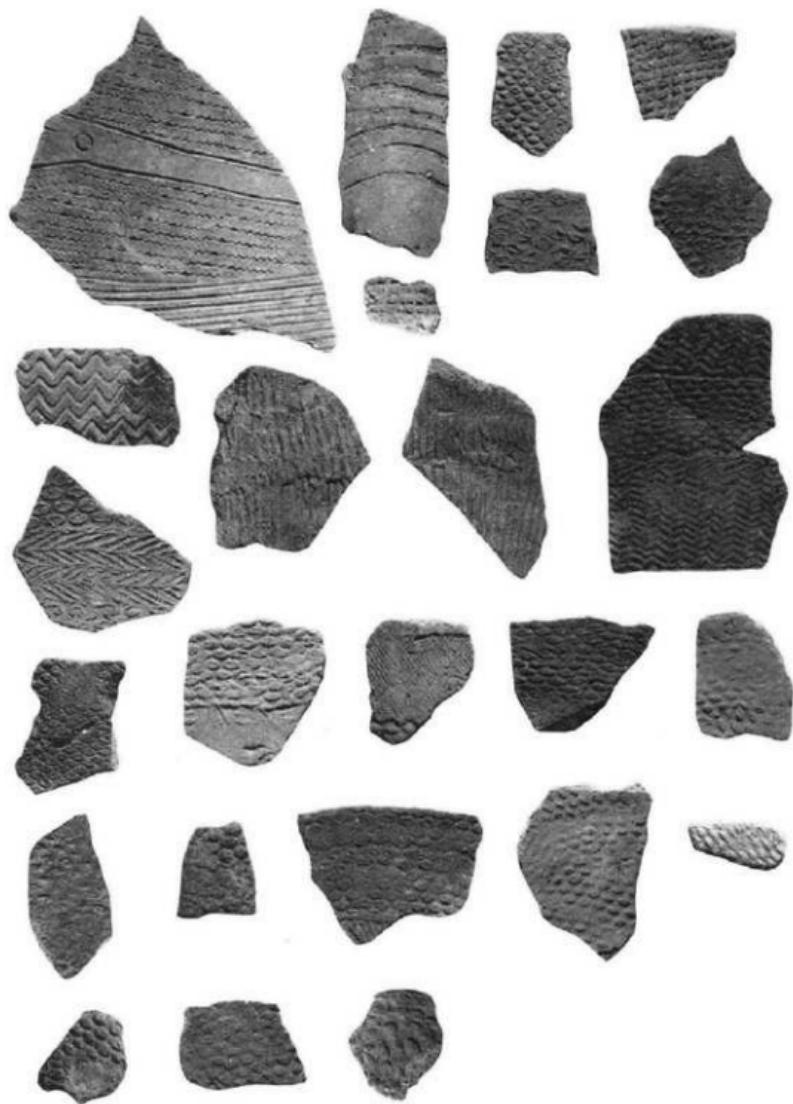
図版9 第5～7土器群



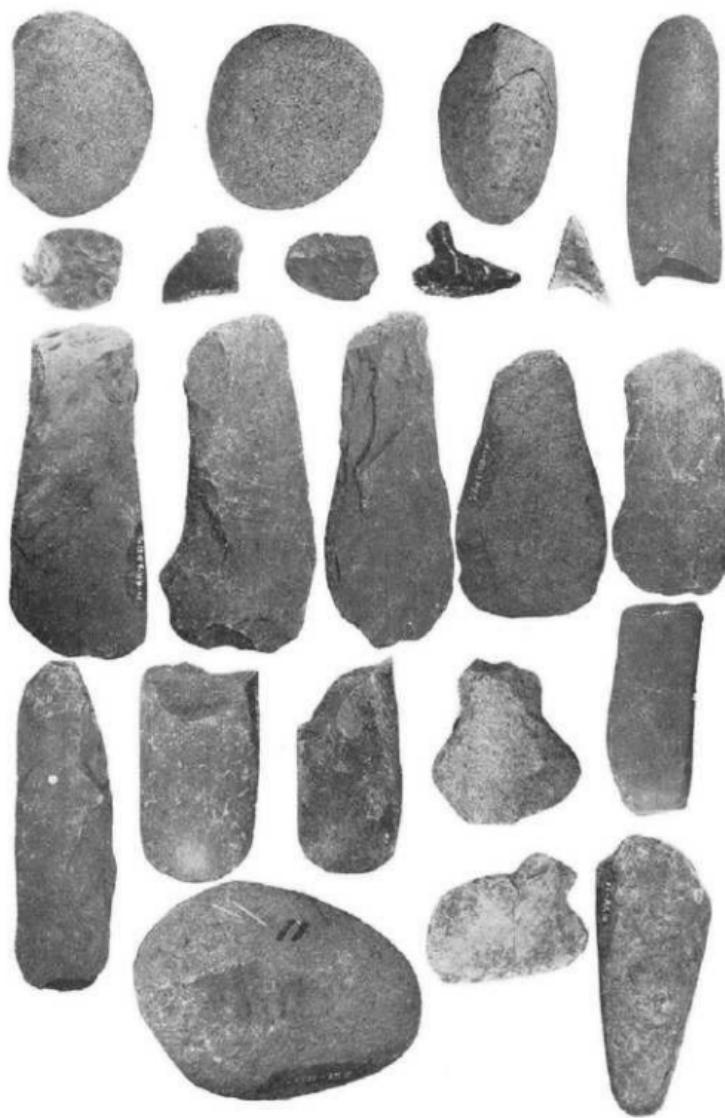
图版 10 第 1 号烧石器出土土器



図版 11 第 1 号 燃石群出土土器



圖版 12 第 1 号、第 3 号燒石群出土土器



圖版 13 石 器

# 浜弓場遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和48年3月30日 印刷

昭和48年3月31日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

興谷市川岸108番地

印刷所 中央印刷株式会社

